板付周辺遺跡調査報告書第18集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第539集

1997

福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書第18集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第539集

1997

福岡市教育委員会

序

福岡市は、豊かな自然環境に恵まれ、地理的条件も加わり、古来より海外交渉の拠点として栄えてきました。稲作農耕の伝播、古代の迎賓館である鴻臚館、貿易都市・博多など多くの歴史遺産が残っています。

しかし、アジアの拠点都市を目指して都市づくりが進んでいる福岡市は変貌著しく、これら各種の開発事業によって、失われゆく埋蔵文化財は増加傾向にあります。福岡市教育委員会では、これらの埋蔵文化財の保存と保護措置に鋭意、努めているところです。

福岡平野のほぼ中央に位置する板付遺跡は、大正6年、中山平次郎博士によって初めて学界に紹介されました。昭和26年には日本考古学協会によって発掘調査が実施され、以後、明治大学・九州大学・福岡県教育委員会・福岡市教育委員会へと発掘調査が引き継がれ、数々の大発見がありました。環濠集落、最古の水田の確認は、板付遺跡が日本最古の農村遺跡の一つであることを確固たるものとしました。昭和51年には、遺跡の中心地が国史跡に指定され、平成7年には、指定地内の整備も終了し、弥生時代開始期の史跡として、広く市民に親しまれているところであります。

本書は、昭和52、53年度に発掘調査を実施した板付遺跡の成果の一部を報告するものです。調査はいずれも、住宅改築に伴う緊急調査でありますが、調査区は指定地に隣接し、板付遺跡の歴史を解明するには、欠かせない資料を提供しています。

発掘調査から報告書作成までは長時間を要する結果となりましたが、その間、ご指導いただきました先生方をはじめ、地元の皆様、発掘作業員、整理作業員等、多くの方々の協力を得ましたことに深甚の感謝を表するものであります。

本書が埋蔵文化財の保護と理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただけることを願うものであります。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　言

1．本報告書は、福岡市教育委員会が、国庫補助を受けて、昭和52、53年度に実施した福岡市博多区板付および周辺の民間宅地造成に伴う緊急調査の報告の一部である。

2．本書に収録した調査区の発掘調査は、山崎純男、沢　皇臣、山口譲治、横山那継が担当し、本文の執筆は山崎が行った。

3．本書に使用した図、写真の作成、撮影には山崎、沢、山口、横山、原　俊一、前田義人があたり、製図は山崎があたった。

4．調査に関わる図面、写真などの記録類と出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される。

5．本書の編集は山崎がおこなった。

遺跡調査番号　7713．7715．7838　　遺跡番号　ITZ　20．22．26

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査体制……2
　３．周辺の遺跡と歴史的環境……4
第２章　Ｆ－５ａ区の調査……7
　１．調査区の位置……7
　２．遺構と遺物……7
　　(1)　第１号貯蔵穴と出土遺物……7
　　(2)　第２号貯蔵穴と出土遺物……9
　　(3)　第３号貯蔵穴と出土遺物……11
　　(4)　第１号土壙と出土遺物……11
　　(5)　井戸と出土遺物……11
　　(6)　中世溝と出土遺物……21
第３章　Ｆ－５ｂ区の調査……24
　１．調査区の位置……24
　２．遺構と遺物……25
　　(1)　土壙と出土遺物……25
　　(2)　中世井戸と出土遺物……25
　　(3)　その他の遺構……26
　　(4)　包含層出土遺物……26
第４章　Ｆ－６ｂ区の調査……39
　１．調査区の位置……39
　２．遺構……40
　３．遺物……42
第５章　若干のまとめ……49

挿 図 目 次

Fig. 1　板付遺跡の地形と各調査区……3
Fig. 2　板付遺跡の位置と周辺遺跡……5
Fig. 3　Ｆ－５ａ・ｂ・ｃ調査区の位置……8
Fig. 4　第１号貯蔵穴実測図と出土遺物実測図……9
Fig. 5　第２号貯蔵穴実測図と出土遺物実測図……10
Fig. 6　第１号土壙実測図……11
Fig. 7　井戸断面実測図……12

Fig. 8　井戸出土遺物実測図Ⅰ……14
Fig. 9　井戸出土遺物実測図Ⅱ……16
Fig.10　井戸出土遺物実測図Ⅲ……19
Fig.11　井戸出土遺物実測図Ⅳ……20
Fig.12　中世溝断面実測図……21
Fig.13　中世溝出土遺物実測図……22
Fig.14　F－5b区・土層断面実測図……24
Fig.15　F－5b区・土壙実測図……25
Fig.16　F－5b区・中世井戸実測図……26
Fig.17　中世井戸出土遺物実測図……27
Fig.18　包含層出土遺物実測図Ⅰ……28
Fig.19　包含層出土遺物実測図Ⅱ……29
Fig.20　包含層出土遺物実測図Ⅲ……31
Fig.21　包含層出土遺物実測図Ⅳ……32
Fig.22　包含層出土遺物実測図Ⅴ……33
Fig.23　包含層出土遺物実測図Ⅵ……35
Fig.24　包含層出土遺物実測図Ⅶ……36
Fig.25　包含層出土遺物実測図Ⅷ……37
Fig.26　包含層出土遺物実測図Ⅸ……38
Fig.27　F－6b区の位置……39
Fig.28　F－6b区・井戸実測図……41
Fig.29　井戸出土遺物実測図Ⅰ……43
Fig.30　井戸出土遺物実測図Ⅱ……45
Fig.31　井戸出土遺物実測図Ⅲ……46
Fig.32　井戸出土遺物実測図Ⅳ……48

図　版　目　次

PL. 1　(1)　F－5b区（北から）
　　(2)　F－5b区・中世井戸
　　(3)　F－5b区・土壙
PL. 2　(1)　F－5b区全景（東から）
　　(2)　F－5b区・溝と中世井戸
　　(3)　F－5b区・溝と土器
PL. 3　(1)　F－5b区・溝と土器
　　(2)　F－5b区・包含層の土器
　　(3)　F－5b区・土器出土状況
PL. 4　(1)　F－5b区出土土器
PL. 5　(1)　F－5a・5b区出土石器①紡錘車（F－5a区）②磨製石斧、③石鏃、④石包丁

PL. 6　(1)　F－6 b区・井戸断面
　　(2)　F－6 b区・井戸完掘後
PL. 7　(1)　F－6 b区・井戸4面遺物出土状況
　　(2)　F－6 b区・井戸3・2面遺物出土状況
　　(3)　F－6 b区・井戸2面遺物出土状況
PL. 8　F－6 b区・井戸4面出土土器
PL. 9　F－6 b区・井戸3面出土土器
PL.10　F－6 b区・井戸2面・1面出土土器

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

板付遺跡は、福岡市博多区板付２丁目から５丁目にかけて広がる大規模な弥生時代を中心とした遺跡である。江戸時代の終り頃、遺跡の中央部に位置していた通津寺境内から広形銅矛５口が発見され、大正時代には、通津寺の東に存在した墳丘墓らしい高まりが土取りにあい、前期末に属する甕棺群(金海式か？）が発見され、数基の甕棺から細形銅剣、細形銅矛各３口が出土し、遺跡の重要性は古くから認識されていた。昭和26年から開始された日本考古学協会、明治大学、九州大学を中心とした発掘調査は、縄文時代から弥生時代への移行過程、換言すれば、弥生時代開始期の諸問題の解明を意図したものであった。その成果は、集落を濠で囲む最古の環濠集落が明らかにされ、炭化米、土器上に残された籾圧痕、石包丁等の大陸系磨製石器、弥生式土器等から最古の稲作農耕の存在が確認され、最古の農村の姿をうかびあがらせることとなった。日本歴史の中でも最も重要な成果を得ることになったのである。

昭和40年代後半にはじまる開発の急増は、板付遺跡周辺においても例外ではなかった。遺跡中心部の環濠集落の西側の広大な沖積地に市営・県営の住宅団地の建設が進められたのをはじめ、いずれも宅地造成等の開発で、それに伴う緊急調査は福岡市教育委員会が実施してきた。緊急調査の成果も重要である。集落西側の沖積地では弥生時代以降の全期間を通しての水田関連遺構が確認され、多量の木製農具をはじめとする木製品が出土し、それらは弥生時代の農村の姿を如実に示すものであった。また、遺跡の範囲がさらに拡大することも確認され、遺跡の重要性は増々高まることとなった。

昭和51年６月21日には、日本歴史の解明に欠くことのできない重要な遺跡として、環濠集落を含む遺跡の中心地と隣接した沖積地の27,796㎡が国の史跡として指定された。

板付遺跡および周辺遺跡は、その重要性から、昭和48年以来、民間の宅地造成や住宅建設に伴う遺跡破壊については、国庫補助金を受けて緊急調査を実施してきているが、ここに報告する昭和52・53年度の調査地区は、史跡指定地内から、指定地外への移転に伴う住宅建設が多く、遺跡保存のための措置が、指定地外の遺跡を破壊するという矛盾した現象を生み出す結果となった。昭和52・53年度の調査区は次のとおりである。なお、本報告書に収録した調査区はゴチックで表示している。

１．Ｅ－９ａ区　板付５丁目７－89　斉藤久太氏所有地　198.99㎡　検出遺構　時期不明の柱穴状ピット

２．Ｅ－９ｂ区　板付５丁目　検出遺構　袋状竪穴２基　不明土壙（地下式横穴？）１基　溝１条

３．Ｉ－11区　諸岡２丁目

検出遺構　掘立柱建物１棟（２間×３間）溝１条

４．Ｆ－８ｂ区　板付５丁目７－18～22　世利昌子氏所有地　214.34㎡　検出遺構　溝２条　竪穴４基　井戸１基

５．**Ｆ－５ａ区**　板付２丁目12－15　藤島紀元氏所有地　150.79㎡　検出遺構　袋状竪穴３基　井戸１基　不明土壙１基　柱穴状ピット多数　溝１条

６．**Ｆ－５ｂ区**　板付２丁目12－19、20、27　荻林幸雄氏所有地　140.76㎡　検出遺構　溝１条　不明土壙１基　柱穴状ピット　井戸１基

７．Ｆ－５ｃ区　板付２丁目12－10外　山浦盛雄氏所有地　554㎡　検出遺構　井戸３基　竪穴３基

溝２条

8．Ｆ－６a区　板付５丁目３－14外　小西利三氏所有地　328㎡　検出遺構　袋状竪穴13基　竪穴６基　地下式横穴１基　中世土壙１基　井戸１基　防空壕２基　柱穴状ピット多数

9．Ｆ－６b区　板付５丁目４－３　検出遺構　井戸１基

10．Ｆ－７a区　板付５丁目３－26　中牟田勝昌氏所有地　450㎡　検出遺構　袋状竪穴２基　地下式横穴２基　不明土壙２基　防空壕１基

11．Ｆ－７b区　板付５丁目３－４　中牟田勝昌氏所有地　327㎡　検出遺構　井戸４基　掘立柱建物１棟　土壙１基　不明竪穴１基　柱穴状ピット多数

12．Ｆ－７c区　板付５丁目３－26　中牟田勝昌氏所有地　327㎡　検出遺構　袋状竪穴２基　竪穴住居址１基　井戸２基　近世甕棺５基　不明土壙１基

13．Ｆ－７ｄ区　板付５丁目３－26　中牟田勝昌氏所有地　100㎡　検出遺構　井戸１基　溝１条

14．Ｇ－７a区　板付５丁目２－２外　中牟田久人氏所有地　1,410㎡　検出遺構　水田址　取排水施設２ケ所　堰１ケ所　水路３条　溝１条

15．Ｇ－７b区　板付５丁目２－１外　中牟田久人氏所有地　554㎡　検出遺構　水田址　水路２条　井堰１ケ所　取排水口１ケ所

２．調査体制

文化課では、緊急調査の急増により、調査体制の整備が不充分であり、埋蔵文化財係、板付遺跡調査事務所の両係合同の調査体制を組み、市内の緊急調査に備えることとなった。昭和52・53年の緊急調査のうち、板付遺跡および周辺遺跡、有田・小出部遺跡群の３ケ所、神松寺御陵古墳を以下の体制で扱当することとなった。他遺跡については、すでに報告書を刊行しているので、詳細は報告書によられたい。

調査地区　福岡市博多区板付および諸岡

調査期日　1977（昭和52）年５月11日～1979（昭和54）年１月20日

調査主体　福岡市教育委員会文化部文化課板付遺跡調査事務所

調査関係者

調査指導委員（肩書は当時）

岡崎　敬（九州大学教授）

横山浩一（九州大学教授）

森貞次郎（九州産業大学教授）

三島　格（福岡県教育庁文化課課長）

藤井　功（福岡県教育庁文化課課長）

下条信行（九州大学助手）

後藤　直（福岡市歴史資料館）

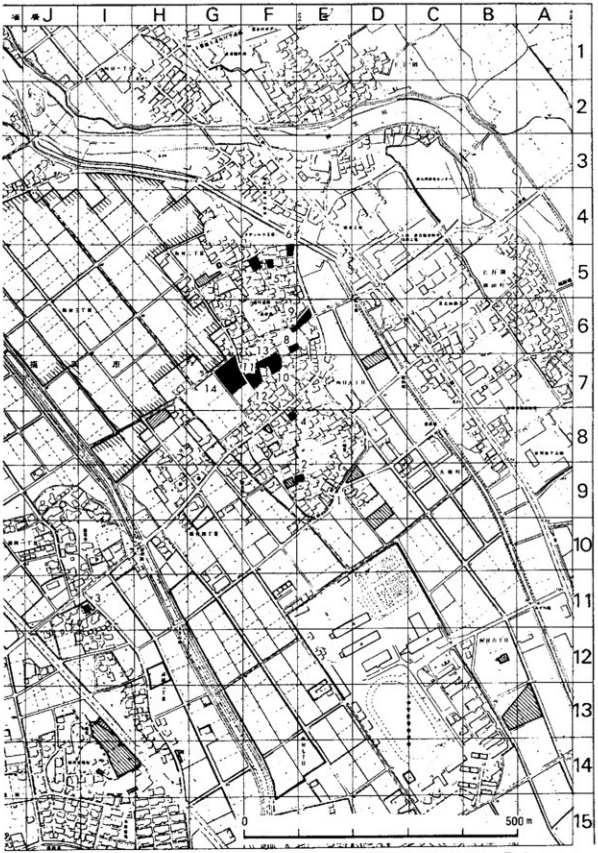
福岡市教育委員会

教育長　戸田成一（当時）　町田英俊（現）

文化部長　志鎌幸弘（当時）

文化財部長　後藤　直（現）

文化課長　清水義彦　井上嘱紀（当時）



1. E-9a 2. E-9b 3. I-11 4. F 8b 5. **F-5a** 6. **F-5b** 7. F-5c
8. F-6a 9. **F-6b** 10. F 7a 11. F-7b 12. F-7d 13. F-7c 14. G-7a,b

Fig. 1　板付遺跡の地形と各調査区

埋蔵文化財課長　荒牧輝勝（現）
板付事務所長　楢崎幸利（当時）
庶務・会計　安田正義・河鍋好輝（当時）・内野保基（現）
発掘調査担当
山崎純男（文化課埋蔵文化財係）
沢　皇臣（　〃　板付調査事務所）
山口譲治（　〃　　〃　　）
横山邦継（　〃　　〃　　）
調査補助員
原　俊一、前田義人、奈良崎和典、森瀬圭子、小野由美子、村上順子、伊崎俊秋、木下尚子、
田口真理、久保智康、山田成洋、市橋重喜、松永幸男、谷　豊信、為貞由紀、速水信也、
出利葉浩司。

3．周辺の遺跡と歴史的環境

板付遺跡は福岡平野のほぼ中心にあるため、周辺には重要な遺跡が多い。以下周辺遺跡と歴史環境の概略をみていこう。

先ず、歴史の幕あけは先土器時代にさかのぼる。板付遺跡の南西約0.7kmの諸岡遺跡ではナイフ形石器、細石器を主体とした有力な先土器時代の遺跡が調査されている。また散発的ではあるが、板付遺跡のある中位段丘Ⅱ面上や那珂台地の数ケ所から先土器時代の石器が発見され、井相田遺跡や板付遺跡、那珂君休遺跡などの沖積地からも流れ込みの石器が出土している。今後、さらに遺跡数が増加する傾向にあり、編年や旧石器人の動向が判明する日も近いと考えられる。

縄文時代の遺跡も先土器時代同様にその数はきわめて少ない。板付遺跡の水田の下層の低位段丘上から、押型文土器、撚糸文土器、無文土器等が出土したのが唯一の調査例である。なお、押型文土器は諸岡遺跡からも数点出土している。最近、低地の沖積地から縄文時代の遺物が発見されつゝあり、将来的に有力な遺跡が発見されることは疑いあるまい。しかし、次に述べる弥生時代に、開田をはじめとする開発が進められ、縄文時代の遺跡が破壊されたことはいうまでもあるまい。福岡平野の西に位置する早良平野では、最近、有力な縄文遺跡が相次いで調査され、そのあり方は他の地域と比較しても大きな差がないことが明らかになりつゝある。弥生時代の前史の縄文時代の解明は今後、重要性を増すことはいうまでもない。

弥生時代は、本報告の板付遺跡をはじめとして重要な遺跡に分布している。遺跡の分布は①板付低台地から南方、須玖遺跡等のある春日丘陵へのびる低台地上、②御笠川右岸の月隈丘陵、③御笠川と那珂川にはさまれた比恵・那珂の低台地上、また、④その南の井尻の低台地上に分けることができる。①では須玖岡本遺跡をはじめとして、全域に遺跡が分布している。最近の調査では須玖永田遺跡、須玖坂本遺跡、須玖唐梨遺跡、岡本バンジャク遺跡、赤井手遺跡、大谷遺跡等から青銅器工房遺跡や埋納遺跡が検出されており、青銅器は質・量共に他の弥生時代集落を圧倒している。②では甕棺墓地として有名な金隈遺跡をはじめ、丘陵部において甕棺墓地が調査されている。宝満尾遺跡では前期の袋状竪穴、後期の墓地が調査され、土壙墓から中国・新代に製作されたとみられる昭明鏡やガラス玉、素環頭刀子、鉄斧などが出土している。丘陵部だけでなく、沖積地においても有力な遺跡が発見されつゝある。福岡空港内にある雀居遺跡からは刻目突帯文土器の時期から前期にいたる集落や墓地、あ

1. 博多遺跡群
2. 板付遺跡
3. 那珂遺跡群
4. 箱崎遺跡群
5. 青柳遺跡群
6. 比恵遺跡群
7. 那珂遺跡群
8. 那珂川ダム遺跡、那珂君休遺跡
9. 板付遺跡
10. 諸岡遺跡
11. 雀居遺跡
12. 五十川高木遺跡
13. 井尻遺跡群
14. 日佐原遺跡
15. 須玖坂本遺跡
16. 須玖永岡遺跡
17. 須玖岡本遺跡
18. 須玖西小田遺跡
19. 赤井手遺跡
20. 三宅廃寺
21. 野多目遺跡
22. 野多目松尾遺跡
23. 井相田遺跡群
24. 麦野遺跡群
25. 三筑牛産遺跡
26. 南八幡遺跡群
27. 雑餉隈遺跡群

Fig. 2　板付遺跡の位置と周辺遺跡

るいは後期の環濠集落が発見されている。前期遺跡では多量の木製品が出土し、前期の農耕具の実態が明らかになり、墓地からは数少ない前期人骨が出土するなど注目を集めている。また後期の環濠集落からは大型の掘立柱建物が検出され、新たな問題を提起している。溝中からは木製短甲や盾が出土している。なお、赤穂ヶ浦遺跡から出土した銅鐸鋳型も注目される。③地域でも、ビル建設に伴う調査が増加し、その重要性が明らかになりつゝある。かって区画整理のため丘陵が削平され、遺跡の中心部分が破壊されているにもかかわらず、重要な遺構や遺物が出土している。まさに、奴国の中心部であることがうなづける。④地域は調査が少ないために内容不明な部分が多いが、井尻B遺跡からは彷製鏡や銅鐸の鋳型が出土しており、比恵・那珂から井尻に連なり、さらに春日丘陵にいたる地域の重要性が再確認されているところである。

古墳時代においても、低台地上の集落は継続している。平野の中心部に南北に延びる低台地上に首長墓の形成がみられる。那珂八幡古墳は、全長約70mの前方後円墳で、追埋葬時の木棺直葬の主体部から三角縁神獣鏡が出土し、福岡平野の中では最も古式の古墳である。那珂八幡古墳の北側、アサヒビ--ル工場内には横穴式石室を主体部とした前方後円墳・剣塚古墳があり、確認調査の結果、隣接して削平された前方後円墳1基が明らかになった。博多の砂丘部では、ビル建設に伴い前方後円墳1基が新たに明らかになった。この古墳は基底の葺石が残るのみで、内部主体は失われていたが、ハニワを有している。板付遺跡内には横穴式石室を主体とする円墳一基があり、諸岡丘陵にも数基の円墳がある。うち--基には円筒埴輪を伴う、後期群集墳は月隈丘陵に形成されているが、調査が進んでいないためその内容等は不明な点が多い。

古代においては、福岡平野は那珂、御笠、席田の三郡に分割されるが、大半は那珂郡に属する。板付遺跡は那珂郡板曳郷に組み込まれることになる。那珂郡衙の所在地はいまだ不明であるが、博多区那珂に設けられた可能性が強くなってきた。那珂や井尻では百済系の古瓦が多量に発見されている。また、那津宮家に関連すると考えられる遺構も比恵や那珂遺跡群で発見されている。三列を単位とした掘列とその中にある大型の倉庫群や建物がそれである。時期的には6世紀後半にあたる。

第２章　Ｆ－５a区の調査

１．調査区の位置

板付遺跡の中心である中央台地北端近くに位置する。史跡指定地の北端に隣接し、環濠北側から約40m離れた所である。宅地造成に伴う緊急調査であったため調査範囲は広くない。造成前は畑地に利用されていた。Ｆ－５b調査区は東に30m離れ、Ｆ－５c調査区は西に15m離れて位置する。

調査区は環濠のめぐる最高位から徐々に下がる緩傾斜面にあり、標高10.0mを測る。中位段丘Ⅱ面上にあり、約40cmの攪乱層を除去すると、すぐ遺構面に達する。遺構面の基盤層は烏栖ローム層となっている。烏栖ローム層は厚0.7m、その下部は同様の阿蘇Ⅳの白色の八女粘土層で、厚2.0mを測る。八女粘土層の下部は硬くしまった砂礫層である。この層は板付遺跡の主な湧水源となっており、弥生時代の井戸の掘削は、この砂礫層まで達しているものが多い。なお、湧水源は烏栖ローム層と八女粘土層の間にもあるが、水質が悪く、雨水時の湧水のみで、保水量が少なかったものと思われる。弥生時代の井戸では、この部分に大きな崩落がみられる。

遺構の遺存状態は極めて悪い。弥生時代の遺構は底面を残すのみであり、約１m以上の削平が認められる。削平時期は、中世の遺構の遺存状態から、中世以前あるいは中世におこなわれたと考えられる。

２．遺構と遺物

(1)　第１号貯蔵穴と出土遺物

第１号貯蔵穴（Fig.５）

中世以降の削平によって上半部が削平され、底の部分のみが残っている。後述する第２号、第３号貯蔵穴も同様の状態で、削平は遺構の残存状態から１m以上におよんでいたと考えられる。１号貯蔵穴は北半部が中世溝によって切られ、失われている。現状では長径2.1m、短径1.8mの不整形プランであるが、元来は、推定長径2.5m、短径約２mの隅丸長方形プランをなすものと考えられる。深さ約50cmである。南西側と北東側の壁は部分的に袋状をなす。床面の中央部分には粘土が敷かれ、固められている。埋土中より弥生式土器１片と混入したと考えられる青磁器片１点がある。なお、概報において出土遺物はないとしたが、ここで訂正しておきたい。

出土遺物（Fig.５～２、３）

弥生式土器と青磁器の各１点がある。青磁器は遺構検出面の攪乱部分より出土したもので、元来、この貯蔵穴に伴うものではない。

１は弥生式土器の甕形土器の口縁部破片である。口縁部は如意形に屈曲し、胴部はあまり張らずに下方にのび、やや古い形態を示しているが、口縁部の刻目は口縁下端のみに刻まれている。刻目は左あがり気味で、ヘラによる刻みである。口縁上半部は横ナデ調整である。内部の口縁下には指圧痕が認められる。外面はヘラナデによる調整で、特に口縁下にはヘラによる押え状のナデ痕が認められる。外面にはススの付着が顕著である。胎土には多量の石英、長石の砂粒が混入される。焼成は良好、色調は外面が暗褐色、内面が暗黄褐色を呈している。２は青磁器の皿、復原口径11.6cm、器高3.6cmを測る。全体に淡緑色の釉を厚くかける。タタミ付きの部分は露胎で、赤褐色に変色している。削り出しの高台はやや高く細い。体部に全面に鎬蓮弁の文様がある。この青磁器の年代は隣接する中世溝と

Fig. 3　F－5a・b・c調査区の位置

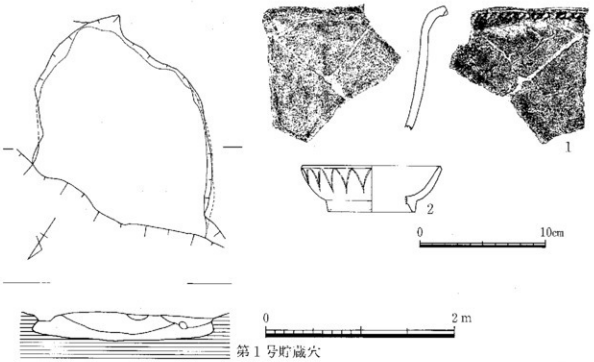


Fig. 4　第１号貯蔵穴実測図と出土遺物実測図

一致している。

⑵　第２号貯蔵穴と出土遺物

第２号貯蔵穴（Fig. 6）

一部が発掘区外にのび、また、発掘区内の一部にも大きな攪乱があり全掘していない。削平のため底部近くの約30cmの深さを残すのみである。部分的に不明なところもあるが、長径約2.7m、短径約2.0mの隅丸長方形あるいは長楕円形プランをなす。遺構床面の東に片寄って一段深い穴が掘り込まれている。このピットも未掘部にかかっているため全形を知りえないが、深さは約40cmを測る。また、西壁中央部に接して、深さ約10cm、径約20cmの小ピットが掘り込まれている。上部が削平されているために、掘り込みが袋状になっていたかどうかは明らかでない。現状では一段目、二段目掘り方は比較的ゆるやかな角度で掘り込まれている。出土遺物は２個体の完形の小型壷があるのみであるが、その分析は、この遺構の性格を方向づけるのに重要なことはいうまでもあるまい。小型壷の出土位置は、１個が深い掘り込みのある反対側の、北壁と西壁のコーナー付近、もう１固体が南壁と西壁のコーナー付近で、共に横位の状態で、床面より約20cm浮いている。

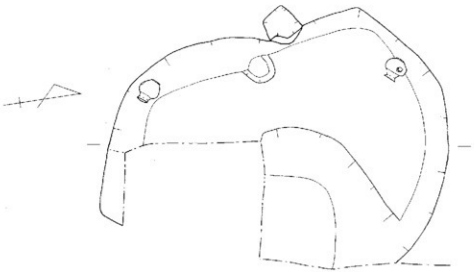
以上からはこの遺構の性格を知ることは困難であるが、後述する土壙の存在等も加味すれば、土壙墓とその副葬品とみることもできる。また、貯蔵穴として否定する材料もない。いずれにしても、弥生時代前期初頭の遺構としての位置は重要である。

遺物（Fig. 6－1、2）

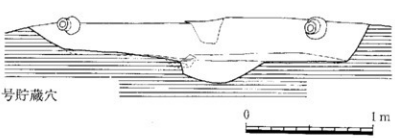
共に板付Ⅰ式土器の小型壷の特徴を良くそなえた土器である。２の胴部の一部が攪乱のため破損しているのみで、完形品である。

１は口縁径9.1cm、器高17.2cm。胴部の最大径は胴中位よりやゝ上部にあり15.1cmを測る。底部は円盤貼り付け状になるが、高さは低く、底径6.6cm。口縁部の肥厚は顕著ではなく、口縁下の段は不明瞭

である。口縁端部は丸くおさめている。頸部はやゝ短く、肩部には細い沈線をめぐらし、段を形成している。内面の接合部の段は強く、明瞭である。全体を横方向のヘラ研磨で調整している。本来は彩文土器であった可能性が強いが、詳細な観察を行ったにもかかわらず、その痕跡をみいだすことはできなかった。2は、口縁部径10.0cm、器高17.5cm、1に比較し横に張りがある土器で、胴部最大径は胴中位にあり、18.0cmを測る。底部は円盤貼り付け状の円筒形をなすが、高さは低く、古い形態を示



第2号貯蔵穴



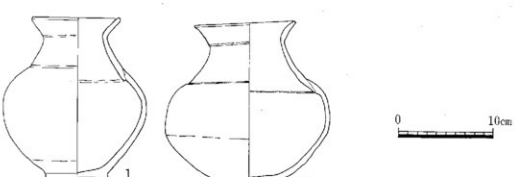


Fig. 5　第2号貯蔵穴実測図と出土遺物実測図

している。底部径6.0cm、口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ、下端に段を形成する。頸～胴部の境には浅い沈線をめぐらし明瞭な段を形成する。器体上半部は右から左の横方向のヘラ研磨、胴下半部が右から左上に施された斜方向のヘラ研磨を右まわりに施している。内面は頸部と胴部の境に明瞭な粘土接合部の段を形成している。頸部の形成は指によるしぼりが加えられ、指圧痕が縦位の凹部となって残っている。この土器も彩文土器であった可能性が強く、口縁部内側と外面の一部に丹塗りの痕跡が残っている。この土器の整形の粘土帯は幅3cm前後で、内傾に接合している。1、2共に胎土は精選された精良な粘土を使用している。若干の石英、長石の砂粒を含むが、甕形土器や大型の壺形土器の胎土との区別は容易である。焼成は良好、色調は1が灰褐色、2は赤褐色をなす。

(3) 第3号貯蔵穴と遺物

第3号貯蔵穴

調査区東壁に大部分が入り込み、その一部を調査しただけである。プランを明らかにすることはできないが、調査した部分からすれば、長方形プランをなすと考えられる。削平が著しく、底部までの深さ約7cmが残るのみである。

遺　物

残存状態が悪く、また一部を掘ったのみであるため、遺物は出土していない。

(4) 第1号土壙と出土遺物

第1号土壙（Fig.6）

調査区のほぼ中央に検出した土壙である。第2号貯蔵穴の東約2mの所に位置する。貯蔵穴等の状況からすれば、かなりの削平が考えられる。土壙は現状の上縁で、南北長125cm、東西長60cmの長方形プランをなすが、北側と東側では20～30cmの浅い凹みが拡がる。底面は南北長122cm、東西長57cmの相似した長方形プランをなす。底面は平坦である。土壙の深さは40cm。掘り方は直に近い角度を示す。南東コーナーには一部木棺小口の掘り込みらしい溝状の掘り込みがある。形状からすれば、土壙墓あるいは木棺墓の可能性が強い。また、上縁部の周囲の凹みは削平を考慮すれば、この土壙は二段に掘り込まれ、凹みは一段目掘り方のなごりとみられようか。

遺　物

土壙内からは遺物の出土はない。ただし、土壙埋土の色や状態から、この遺構が弥生時代に属する可能性は強い。

(5) 井戸と出土遺物

井戸（Fig.7）

調査区の北東隅に検出した遺構である。表土層を除去した直下の烏栖ローム層が検出面である。平面プランは径約1mの円形で、発掘当初は袋状の貯蔵穴と考え、調査を進めたが、途中で井戸であることに気付き、調査方法を変更し、一部断面調査を進めながら、壁の崩壊に注意し、完掘することができた。

井戸は現状で3.19mの深さがあるが、削平を考慮すれば、4mを越える深さを有している。検出面から約90cmで、烏栖ローム層から八女粘土層に移行するが、この層の変換部分が、この井戸の第1番目の湧水点となっている。そのために、壁が大きく崩壊し、層

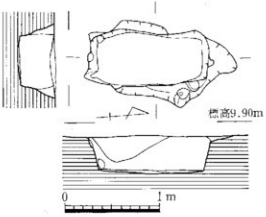


Fig.6　第1号土壙実測図

の変換点を中心に大きく拡大し、約2.5mの範囲まで拡がっている。ただし、井戸本来の掘り込みは素掘りの円筒状をしていたとみられる。第1の湧水点は常時水が湧くのではなく、降雨時にのみ湧水があったと考えられ、この井戸の本来の湧水部分は、八女粘土層下にある砂礫層であることは明白である。八女粘土層と砂礫層の境界は、検出面下275cmの所である。井戸の底は序々にすぼまり、尖り気味に掘削されている。

この井戸の埋土の状態はFig.7に示したとおりである。第1～3層は袋状貯蔵穴として調査を進めたので、断面図には図示できなかったが、第1層は黒褐色粘質土層。第2層は第1層と大きな変化はないが、鳥栖ロームの粒を含む。第3層、黒褐色粘質土層となっていた。第1～3層の厚さは56cm前後、埋土中には細片となった土器が少なからず包含されていた。第1～3層は、いずれもレンズ状の堆積である。第4層は壁の崩壊した部分に堆積した土層である。黒褐色粘質土層で、鳥栖ロームの粒子を多く含んでいる。厚さ10cm前後。第5層は井戸中央から壁の崩落部に堆積した土層で、井戸中央ではレンズ状の堆積をしている。暗褐色～黒褐色粘質土層で、層中に鳥栖ロームのブロックを含んでいる。厚さ10～20cm。第4、5層共に、第1湧水点の壁が崩落した以後に堆積した層とすることができる。

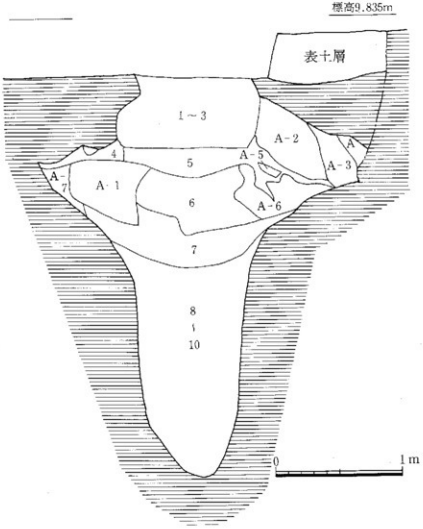


Fig.7　井戸断面実測図

第6層は井戸中央部に堆積している。暗褐色～黒褐色粘質土層で八女粘土が混入している。厚さ30～40㎝。周囲には崩落した烏栖ロームのブロックが囲んでいて、壁の崩落時に堆積しつゝあったことがわかる。第7層はレンズ状に堆積している。茶褐色粘質土層で、厚さ10～40㎝。この土層堆積の段階では、まだ第1湧水点の壁の崩落はみられない。第8層　砂を混入した灰黒色粘質土層で、1m以上の堆積がみられる。この第8層以下は湧水が激しく、土層の観察は不充分であるが、さらに9層と10層に分離できる。いずれもレンズ状の堆積で自然に堆積した土層とみることができる。第9層は黒灰色粘質土層、第10層は灰色粘質土層で、順次灰色が強くなる。第10層には人為的に投棄されたと考えられる完形に近い土器や木製品が出土した。A　1～A　7は烏栖ローム層のブロックである。

遺物（Fig. 8～11）

井戸より出土した遺物には土器、ミニチュア・・土器、木製農具、火鑽臼等がある。これらの遺物には、元来、この井戸に伴うものと、井戸が埋まる過程の中で、当時の地表面に散乱していた、井戸が作られ使用された以前の遺物が混入したものの二者が存在する。

Fig. 8－1～9は第3層出土器の実測図である。いずれも小破片で全形を知ることはできない。7～9は甕形土器の底部で、中期のものと考えられる。外面は縦位の刷毛目調整。1は直口した口縁部。内面は横位の細い刷毛目調整。2は口縁上面が肥厚し、上面と口縁端に貝殻の押圧文がある。3は二重口縁。4はくの字形口縁の甕形土器か、5は蓋か、外面は横位の刷毛目調整。6は中期の高坏か壺形土器の口縁であろう。

Fig. 8－10～24は4層出土土器である。上層同様に細片が多いが、若干大きい破片も含む。10～12は中期の逆L字、T字形口縁をもつ甕形土器である。11、12は外面は縦位の刷毛目調整。14～19、21はくの字形口縁の甕形土器の口縁部破片か。21は口縁端部を欠くが、器形、器面調整は知ることができる。外面は縦位のヘラナデ状、内面はナデ調整である。頸部径14.8㎝。13は逆L字形口縁。20は二重口縁の端部付近の破片。22は椀形の土器である。23は脚端部破片。外面に縦位の刷毛目を施す。24は甕形土器の底部、外面は縦位の刷毛目調整。中期に比定される。第4層出土土器は、中・後期土器が混在しており、いずれも混入とみられる。

Fig. 8－25～38は第5層出土土器である。いずれも小破片で、器形が判明するものは少ない。26、35は内外共に丹塗りの土器である。35は椀形品、25、26、28～31はくの字形口縁の甕形土器か。25は内面が斜位、外面が縦位の刷毛目調整。26は内面が横位の刷毛目調整である。32ははねあげ口縁、34は二重口縁の口端部。36は口縁端にむかって肥厚する。壺の口縁か。37は壺の底部破片。38は高坏破片、いずれも混入品と考えられる。

Fig. 8－39～53は第6層出土土器である。いずれも細片で、量的にも多くない。39、42は逆L字形口縁をもった中期の甕形土器である。39は復原口径31.2㎝。43は鋤先口縁をもった高坏形土器とみられる。41は逆L字形の口縁部をもつ高坏形土器。52、53は二重口縁の壺形土器の口縁端部。44、46～49は甕形土器の口縁部。47ははねあげ口縁。40は脚端部破片で、脚端部は丸く肥厚する。50は高坏の脚筒部。外面は縦位の刷毛目調整。内面にはしぼりの痕跡がみられる。51は長頸壺の胴部破片とみられる。内外面共に斜位の刷毛目調整が施される。45は甕形土器底部。外面は丹塗り磨研。中期土器とみられる。

Fig. 8－54～95は第7・8層出土土器である。小破片が多いが、かなり作図復原可能な土器も含まれ、量的にも多くなる。54は口縁とその下方に突帯をめぐらした前期末の土器である。復原口径37.5㎝。55、56は逆L字形、T字形口縁の中期の甕形土器。77、79は外面丹塗りで、口縁端部を欠くが袋状口縁の壺形土器とみられる。79は稜線があり、二重口縁に近くなっている。69、70、78、76は二重口

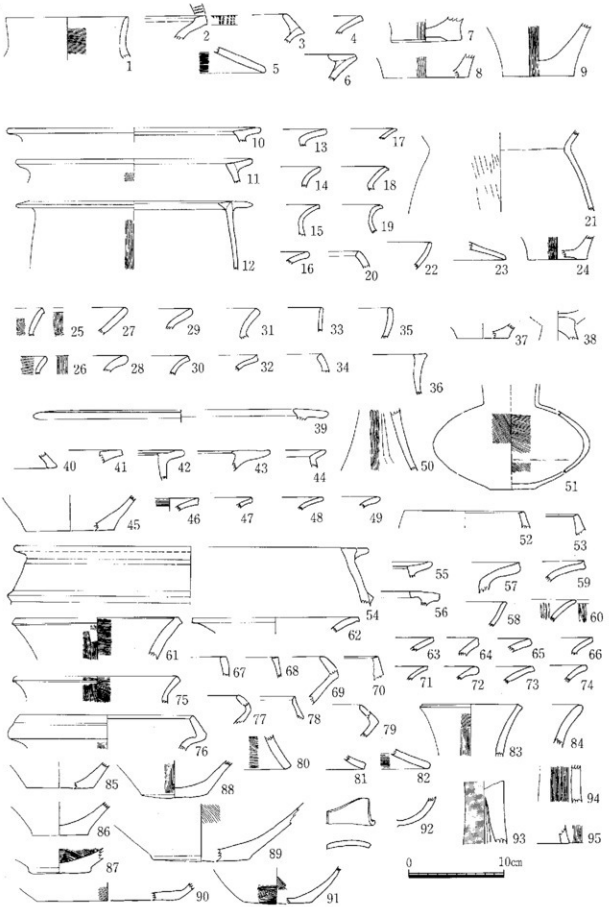


Fig. 8　井戸出土遺物実測図 I

縁の壺形土器の口縁。76は復原口径18.4cm。57、59、60、63～66、71～74はくの字形口縁をもつ甕形土器とみられる。60は内外面共にヘラ状工具による縦方向のナデ調整。59はけねあげ口縁である。61、62、75は甕形土器あるい壺形土器の口縁部である。共に復原口径は17.2cm、17.6cm、16.8cm。61、75は外面縦方向、内面が横方向の刷毛目調整。81、82は高坏等の脚端部破片。82は内面が横方向の刷毛目調整。80、83、84、95は器台の破片と考えられる。80は外面横方向の刷毛目調整。83、95は外面が縦方向の刷毛目調整。93、94は高坏の脚筒部破片。93は外面が丹塗磨研。内面にしぼりの痕跡。94は内外面共に縦方向の刷毛目調整。92は板状の土製品。ジョッキ形土器の把手と考えられる。85～91は底部破片。85、86は甕形土器の底部、他は壺形土器の底部である。87は内面が横方向の刷毛目調整。88は外面が縦位の刷毛目調整。平底ではなく、やゝ丸味をもつ。90は外面が斜位の刷毛目調整。91は内外面共に横位～斜位の刷毛目調整。この層の出土土器には、まだ混入した土器が認められるが、その数は少なくなり、井戸に伴う土器が増加している。

Fig.9は第9層の出土土器である。量的には数を増し、器形のわかるものも少なくない。1、2は壺形土器の頸部から胴部にかけての破片である。頸部と胴部の境に2本の沈線をめぐらす。前期の土器である。3も胴部破片、やゝ高い断面台形の刻目突帯一条をめぐらす。4、5は逆L字形の口縁をもつ甕形土器。4は口縁直下に断面三角形の突帯一条をめぐらしている。5は外面は縦方向の刷毛目調整、共に復原口径は47.0cm、28.8cmを測る。胎土には石英、長石の砂粒を含み、焼成は良好、4は赤褐色、5は暗褐色をなす。6、7、12、13は二重口縁の壺形土器、共に屈曲部の稜線は明瞭である。口縁端部はヘラナデされ平坦。6は外面が斜位、内面が横位の刷毛目調整。7は口縁部外面と頸部内面は横方向、頸部外面は縦位の刷毛目調整。12は外面が縦位、内面が斜位～横位の刷毛目調整。復原口径は6が19.5cm、7が13.4cm。12は頸部復原径16.4cmを測る。4点は共に胎土には砂粒を混入している。焼成は良好、色調は6が褐色、7が赤褐色、12が黄褐色、13が褐色をなす。8～11、14～20、24は口縁がくの字形に外反した口縁をもつ甕形土器。11は口縁端部がつまみあげられる。18～20は口縁端部を丸くおさめる。11は口縁内面が横方向の刷毛目調整。16は胴部外面が縦位、内面が斜位の刷毛目調整。17は口縁外面が斜位、内面が横位の刷毛目調整。18は口縁内側に横位の刷毛目調整を施す。20は口縁部外面に斜位の刷毛目調整。22は口縁外面に縦位のヘラみがき痕。23、28は直口する壺形土器の口縁か。23は口縁端部がつまみあげられ尖る。21、25、26は高坏坏部。26は椀の可能性もある。21は口縁部が大きく内側に屈曲する。25は内外面共に縦位の細い刷毛目が施される。29、30、32、35～37は高坏脚部の脚端部の破片である。29は外面に縦位の刷毛目調整。30は脚の下半には外面から二次的な穿孔がおこなわれ、径1cmの円形の孔があく。外面は縦位～斜位、内面は横位から斜位の刷毛目調整を加える。32は内側に横位の刷毛目調整。35は脚端に粘土を貼り付け肥厚させる。外面は縦位に刷毛目調整を加え、内面はヘラで調整した上に横ナデを加える。36、37は脚端に横ナデを加え平坦にする。36は外面丹塗り。37は外面が縦位～斜位、内面に横位の刷毛目調整。21は復原口径25.0cm、26は16.4cm。30は脚端復原径19.2cm、35は17.8cm、36は21.6cm、37は28.0cmを測る。27は椀形品の口縁部、口縁端部は丸くおさめる。以上はいずれも胎土に石英、長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は赤褐色～灰褐色である。31、33、34、38～41、44は器台である。31は内面が剥離している。口縁端部は平坦に仕上げる。復原口径10.9cm、33は口縁部と脚端部を欠く。口縁が大きく外反し、脚端にむかってゆるやかに拡がる。復原口径は12.8cm前後、外面は平行タタキを施した後、縦位の刷毛目調整を加え、タタキを消している。内面の頸部下半は指ナデによる縦方向の調整を加えている。胎土には石英、長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は黄褐色をなす。34は器形は33とほぼ同様であるが、より端正である。口縁部は急激に外反し、端部は前者と異なり斜になる。筒部は下方

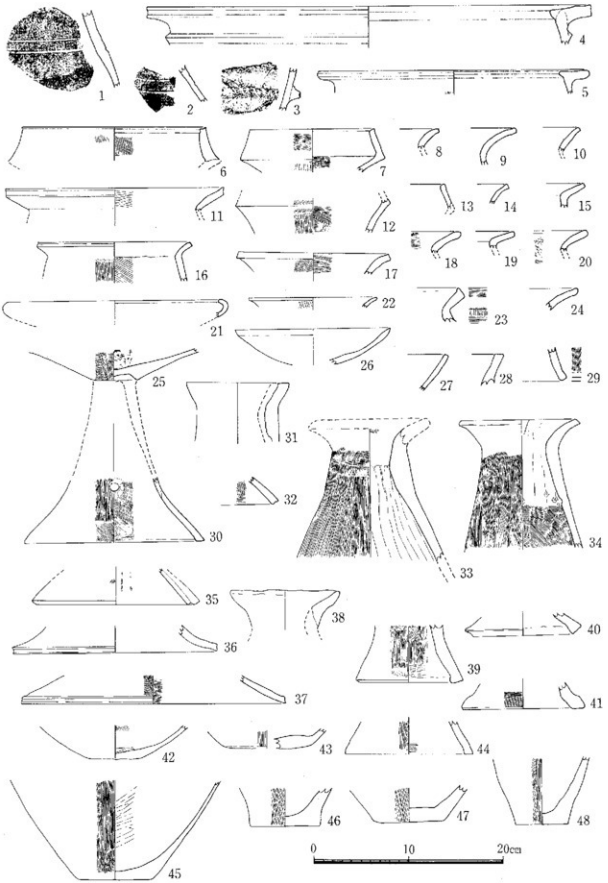


Fig. 9　井戸出土遺物実測図II

にむかってゆるやかに拡がるが、脚下半を欠損する。口縁部～頸部には横方向の刷毛目調整を加えた後、ヨコナデ調整を加えて刷毛目痕を消している。脚部の外面には縦方向の細い刷毛目調整を加えている。内面の上半は指によるかきあげ調整、その下位は斜位の刷毛目調整を加えている。また、内面には多くのヘラ（棒）状の工具で刺突（押え）の痕が残る。復原口径13.0cmを測る。胎土には石英、長石の砂粒を混入している。焼成は良好で暗褐色をなす。38は口縁部のみで、指による調整痕が著しくいびつである。胎土、焼成は前者と同様で、暗褐色をなす。復原口径11.6cm。39は脚端部の破片である。脚端部は内側に張り出し、わずかに肥厚する。外面は縦位の刷毛目調整。内面は外面同様に縦位の刷毛目を施すが、最下端のみ横方向の刷毛目を施している。復原端径11.4cm、胎土、焼成は他と同様、色調は赤褐色で、一部黄褐色をなす。40は端部が斜上方に切り上がる。器形からみると器台でない可能性もある。内外面共横ナデ調整で、壺の口縁部かも知れないが、やゝ器壁が厚い。復原口径10.6cm、色調は灰褐色をなす。41も同様に脚端部の破片である。脚端は平坦で据わりは良い。指による調整でやゝいびつであるが、外面には横方向の刷毛目調整を加える。復原脚端径13.0cm。色調は暗褐色をなす。44は脚端にむかってやゝ内湾気味におさめる。端部は平坦におさめるが、やゝ内側に張り出す。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目調整、復原脚端径13.6cm。色調は赤褐色をなす。42、43、45～48は底部である。42、43、45、47は壺形土器の底部、46、48は甕形土器の底部である。42は底部は小さく、体部は大きく外傾しながらたちあがる。外面はナデ調整、内面の内底部はヘラの端部痕が残り、上にナデ調整を加えている。底部よりあがった所に横～斜位の刷毛目調整痕がみられる。底部径5.0cm、色調は褐色をなす。43は底部がやゝふくらみ気味である。体部のたちあがりは外傾するが、底部との境は不明瞭、底部は中央部が厚くなる。内底部には炭化物の付着がみられる。外面の調整は縦位の刷毛目調整である。底部径10cm前後。45は平底から体部は外傾しながらたちあがるが、あまり張りはない。外底部はヘラナデによる調整。外面は縦位の細い刷毛目調整。内面はヘラ状のもので斜に調整している。器壁はきわめて薄く、0.3cm前後である。胎土には石英、長石の砂粒を含む。焼成は良好、色調は灰黒色をなす。甕形土器の可能性もある。底部径7.4cmを測る。46は安定した平底、外面に縦位の刷毛目調整を施す。47も安定した平底の土器。体部は外傾しながらたちあがるが、張りはあまりない。外面に縦位の刷毛目調整を施す。底部径は46が7.4cm、47は7.4cm。48は体部がやゝ内湾気味にたちあがる。外面には縦位～斜位の刷毛目調整を加える。色調は赤褐色～灰褐色、内底部には指による調整が残る。底部径5.6cm、やゝ小型の土器である。

第9層出土土器は破片も大きく、器形の明らかなものが多い。いずれも井戸使用中において何らかの原因で井戸中にはいったもと考えることができる。ただし、混入したと考えられる前期・中期土器も若干存在することを注意したい。

Fig.10は第10層出土土器である。いずれも完形品に近く、時期の異なったものも見られないので、この出土土器をもって、井戸の時期とすることができる。この層中には木器片もあり、また、後述するミニチュア一土器の存在や他の井戸の状況からすれば、これらの土器の一群は祭祀に関連した可能性が強い。後章において若干の検討を加えてみたい。

1は二重口縁の壺形土器である。口縁を一部欠くが、ほぼ完形を知ることができる。底部は尖り気味の丸底で、胴部は球形をなす。胴部最大径の所に断面台形の突帯一条、頸部と胴部の境に断面三角形の突帯一条をめぐらす。頸部は外傾しながらたちあがるが、大きくは外傾せず、口縁部で内傾にく字形に屈曲する。口縁端部は平坦に仕上げる。口縁部に櫛描きによる三角形文様をめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ調整。頸部外面は縦位の刷毛目調整。胴上半部は斜位～縦位、胴下半部は横位の刷毛目調整。底部およびその上部はヘラ調整によって刷毛目痕を消している。内面は頸部以下が横～斜

位の刷毛目によって調整される。口径16.4cm、器高32.5cm、胴部最大径24.4cm、底部径6.6cm。胎土には石英、長石の砂粒が混入されるが良質、焼成は良好で、色調は褐色をなす。一部に黒斑がある。また、胴部の一ケ所に植物の種子の圧痕がみられる。2、4も二重口縁の壷形土器であるが、2は口縁端を、4は胴部を欠損する。2は底部は平底で、球形の胴部から、ゆるやかに頸部に移行し、口縁部にいたるが、口縁の屈曲は鋭い稜線を形成しない。口縁部から頸部にかけては横方向のヘラ調整で、部分的にヘラの痕跡が残る。胴部は斜位のヘラ調整である、口縁部の1ケ所に板圧痕が認められる。胎土には石英、長石の砂粒が含まれる。焼成は良好で、色調は暗黄褐色で、2ケ所に黒斑が認められる。口縁屈曲部径13.0cm、胴部最大径18.8cm、底部径6.4cm、器高は22cm前後である。4は口縁の屈曲は鋭くなくゆるやかである。口縁端部は平坦に仕上げる。口縁部内面は横ナデ調整、外面は口縁部が横方向、頸部が縦方の刷毛目調整。頸部内面は横方向の刷毛目調整である。胎土には砂粒を含むが良質、焼成は良好で色調は赤褐色をなす。口径23.2cmを測る。3、5、6は長頸壺、3は口縁部を欠き、5、6は口頸部を欠損する。3、5、6は共に小さな平底で扁平な球形の胴部を有する。3は頸部が外反せず直立に近い状態たちあがる。頸部内面には、しぼりの痕跡が縦線として残っている。外面はヘラ調整で仕上げるが、部分的に斜位の刷毛目痕が残っている。胴部内面下半には横方向の粗い刷毛目を施す。胎土には若干の砂粒を含むが良質、焼成は良好で色調は淡褐色、黒斑がある。底部径4.8cm、胴部最大径26.4cm、器高22cm前後である。5は外面がヘラ調整、内面上半部は指調整、下半は縦位の刷毛目調整。胎土に少量の石英、長石の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は暗褐色～灰褐色をなす。底部径38cm、胴部最大径13.6cm。一部に黒斑がある。6は5とほぼ同形同大である。外面は胴下半と頸部に移行する部分がヘラ調整で、その間は縦位の刷毛目調整である。内面は上半部がナデ調整、下半が斜位の細い刷毛目調整。胎土には石英砂粒を混入する。焼成良好で、色調は外面が暗黄褐色、内面が黄褐色、外面の一部に黒斑がある。底部径4.6cm、胴部最大径13.9cmを測る。7は甕形土器である。底部を欠損するが、丸底になると考えられる。口縁部は短かく外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面の頸部以下に縦位～斜位の刷毛目調整を加える。内面は全面に横位～斜位の刷毛目調整。外面底部周辺にはススが付着している。口縁径17.3cm、器高16.0cm前後。胎土に石英、長石の砂粒を混入する。焼成は良好で、色調は暗赤褐色をなす。8は壺形土器の底部破片、外面に縦位の刷毛目調整を施す。内面にはヘラ調整の圧痕がつく。底部径10.4cm。胎土、焼成は他の土器と同じである。色調は外面が黄褐色、内面は黒色である。9は甕形土器の口縁部破片。口縁端部は平坦に仕上げる。内面は刷毛目調整。10は口縁嬰部がやゝ肥厚する。内外面共横ナデ調整。11は甕形土器の口縁部か、口縁端部を丸くおさめる。復原口径16.8cm。12は高坏形土器、口縁部は内側に内湾し、袋状をなす。脚は下方にむかって順次拡がる。口縁部の内外面は横ナデ調整。脚部は外面が縦位～斜く刷毛目調整を加えた後、棒状の工具によって暗文風の縦線を入れる。内面は縦位～斜位の刷毛目調整。復原口径29.6cm、脚端部復原径18.2cm、器高は24cm前後になると考えられる。胎土には若干の石英、長石の砂粒を含むが良質、焼成は良好である。色調は暗黄褐色～灰褐色をなす。13～16はミニチュアー土器である。いずれも手づくねで、器面の凹凸が顕著である。13、14は椀形品。13は底部が丸底で、口縁部は凹凸がある。内面は指によるかきあげの調整痕が残る。口縁部は丸くおさめるが、部分的には尖っているところもある。口径5.4cm、器高3.5cm。14は13よりやゝ浅い。口縁端部はやゝ尖り気味におさめる。復原口径6.9cm、器高3cm前後である。15、16は壺形品。15は11縁部を欠損するが、直立する。調下半の1ケ所に注口がつけられる。外面は巻きあげ状に稜が残る。口径2.7cm前後、器高5.0cm前後になろう。16は口縁部がわずかに外反する。口縁径3.8cm、器高5.9cm。4点共、胎土には砂粒を混入している。焼成は良好で、色調は灰白色をなす。

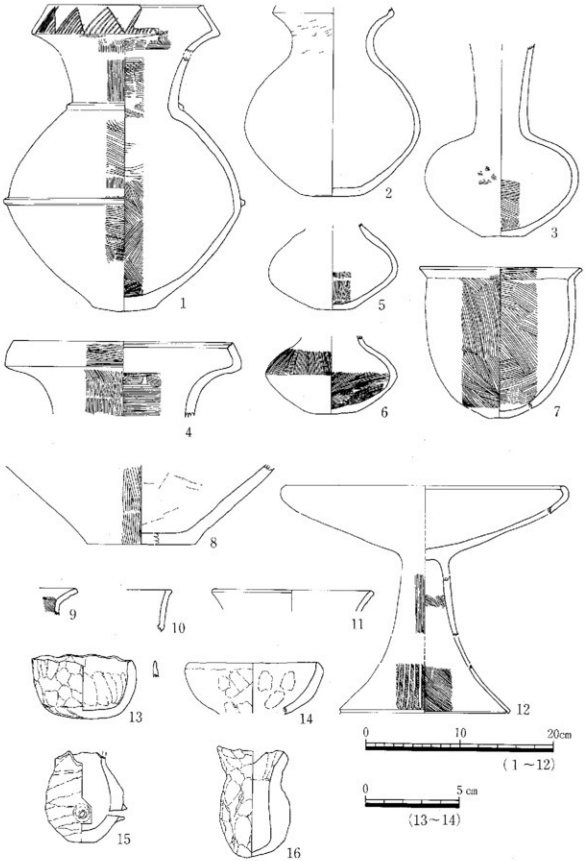


Fig.10　井戸出土遺物実測図III

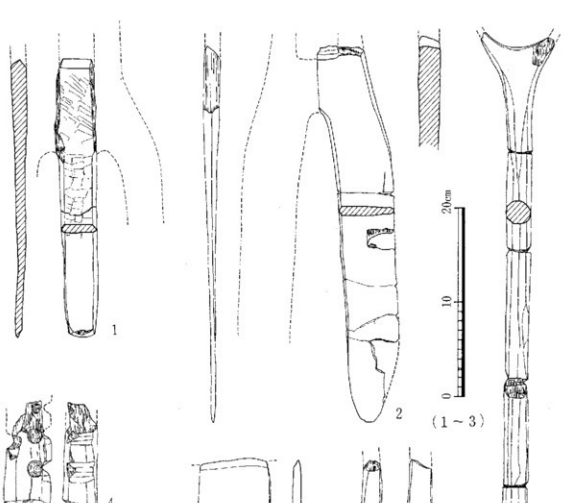


Fig.11　井戸出土遺物実測図IV

木製品（Fig.11）

6点の製品がある。1は三又鍬の破片。柄孔は方形、又先の長さ約20cm。縁は両側共に両面から削られ、断面三角形をなす。両面共に削り痕が顕著に残る。厚さ1.7～0.7cm。2は二又鍬の破片、柄孔は長方形になるとみられる。又先の内側面は両面から削られ、断面三角形をなす。外側面には削りはみられない。先端部は磨耗により丸くなっている。又の長さ32.8cm、厚さ1.7～0.5cm。3は鋤の柄、丁寧に削られ、断面は多角形をなす。柄の基部には把手状の孔があけられるが、欠損し全形を知ることはできない。現存長59.2cm。4は火鍬口、多面体の棒状に仕げ、側面の刻みが2ケ所に残り、他の側面に1ケ所の刻みが残っている。火鍬に使用された部分は側面の刻みと一致し、3ケ所にみられる。径0.8cm前後、深さ0.5cmの円錐状の凹みで、黒く焼けている。現存長5.9cm、幅2.5cm、厚さ1.7cmを測る。5は板状の製品で、両側が両面から削られ、刃部を形成している。幅10.8cm、現存長7.7cm、厚さ

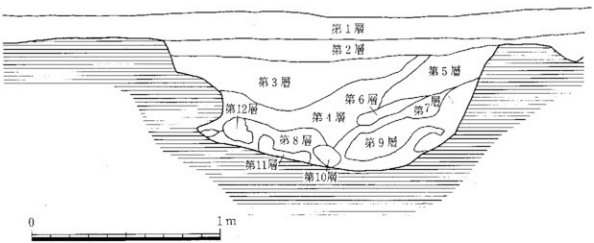


Fig.12　中世溝断面実測図

0.9cmを測る。6は鍬の柄を固定するためのクサビ、両端を欠損する。現存長12.4cm、幅2.7cmを測る。

(6)　中世溝と出土遺物

中世溝（Fig.12）

調査区の北端部に検出した溝である。東西にのびる溝で、東西共に調査区外に延びている。調査で確認したのは約6mで、西側はF－5C調査で確認している。建物等を区画する溝と考えられるが、その全形を知ることはできない。溝は幅2.8m、深さ1.4m、断面U字形をなすが、部分的にはオーバーハングする部分もある。溝内からは、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、青磁器、高麗青磁、スラッグ、弥生式土器等が出土している。なお、溝は第1考貯蔵穴と切り合い関係にあり、溝が貯蔵穴を切っている。

溝中の埋土は次のようになっている。第1層は黒褐色砂質土層の表土層、厚さ28cm前後。第2層　褐色砂質土層　厚さ20cm前後。第3層　黄褐色ローム層（上部に多くのロームのブロックを含んでいる。）厚さ20～50cm。第4層　暗褐色粘質土層　厚さ10～50cm。第5層　第3層と同様の黄褐色土層　厚さ30～40cm、溝の南のみ存在する。第6層　黄褐色ローム土層。第7層　黒褐色粘質土層。第8層、黄褐色ローム層、壁面の崩落によるものと考えられる。第9～12層は黄褐色のロームのブロック層、壁の崩落によって生じたものと考えられる。

遺物（Fig.13）

1は弥生式で土器、板付Ⅰ式の小型壺。口縁部は肥厚し、下端に段を形成している。外面は丹塗り磨研、内面は刷毛目調整後、丁寧なヘラ研磨を加えている。胎土は精撰された精良なもので、焼成は良好。復原口径9.2cm。2、3は磁器の底部、2は高い高台をもつ。底は露胎、内面は淡い青色釉がかけられる。3は幅の低い高台、底部外面は露胎、内面には褐色釉がかけられる。4は土師器、高台は高くない。胎土に多量の砂を混入する。5は瓦器、高台は細く尖る。外面はヘラ磨き、内面は斜にかきあげたヘラ調整。色調は灰白色。6は須恵器、擂鉢と使用されたものか。回転運動による磨滅痕が顕著である。底部径8.4cm。7は擂鉢、5～6本を単位とした沈線が入れられる。胎土に細い砂粒を混入している。焼成は堅致、色調は褐色をなす。底部径11.8cm。8は白磁器の皿、底部はやゝあげ底、

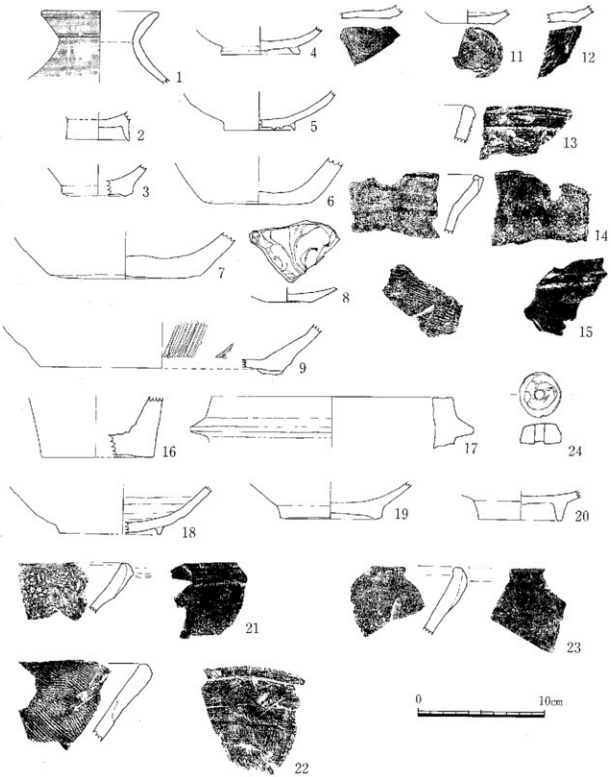


Fig.13　中世溝出土遺物実測図

体部は大きく外傾する。外底部は露胎、見込みには沈線で草花文が描かれる。やゝ灰色がかった白色釉をかける。底部径3.9cm。9は陶製の摺鉢。体部内面に8本単位の沈線を等間隔に入れている。復原底部径19.2cm。10～12は土師器の皿である。いずれも外底部に糸切り痕を残す。13、14、21～23は瓦質土器の鉢の口縁部数片、13は口縁部の上下に浅い凹線をめぐらす。体部外面は横ナデ調整。内面は斜位の荒い刷毛目調整。14は口縁部で屈曲し外反する。口縁端部内側は張り出し、やゝ肥厚する。外面にはススが付着する。内面は横方向の刷毛目調整。胎土には石英の砂粒が多く混入される。焼成は普通で、色調は外面が黒色、内面が黒赤褐色をなす。23は口縁部を肥厚させる。外面は縦方向のナデ調整。内面は横方向の細い刷毛目調整。胎土にはほとんど混入物はみられない。焼成は堅緻、色調は灰白色をなす。22は口縁下に沈線一条をめぐらす。口縁にむかって器壁が厚くなり、端部は丸くおさめる。外面は上方が横方向の刷毛目調整、下方が縦方向の刷毛目調整後、横ナデ調整を加えている。内面は横方向～斜方向のやゝ粗い刷毛目調整。胎土には砂粒の混入は少ない。焼成は堅緻で、色調は灰白色～暗灰褐色である。21は口縁部を帯状に肥厚させる。外面は横位の刷毛目調整後ナデを加える。内面はやゝ器面が荒れているが、斜方向の細い刷毛目調整。胎土は精撰され良質、焼成は良好で、色調は黒灰色をなす。15も瓦質土器である。突帯一条をめぐらし、その上位に刻文がめぐらされる。16は青磁器、やゝあげ底の底部で体部は直にたちあがる。器壁は厚い。外面に灰緑色の釉をかけ、内面には灰黒色の釉がかけられる。底部径9.2cm。18は瓦器椀。高台は低く断面三角形をなす。底部外面はヨコナデ。内外面はヘラ研磨調整。特に内面はヘラでかきあげたようになっている。胎土は精撰され、灰白色を呈する。焼成は堅緻で色調は外面が灰白色、内面が黒灰色をなす。底部径8.0cm。19、20は共に青磁器の底部である。19は幅広の低い高台。体部は内湾気味にたちあがる。高台は露胎で、他は全面に淡緑色の釉をかける。高台径8.0cm。20は高台は高い。外面は露胎で、内面に淡い草色の釉をかける。高台径6.6cm。17は石鍋。滑石製。口縁端部は平坦、口縁下に幅のせまりつばをめぐらす。全体に削り痕が残っている。復原口径19.1cm。24は滑石製の紡錘車。径3.3cm、厚さ1.6cm、断面形は台形をなす。孔径0.8cm。

第３章　Ｆ－５b区の調査

１．調査区の位置

板付遺跡の中心にあたる環濠の存在する中央台地（中位段丘Ⅱ面）の北東端近くに位置している。環濠を中心とした史跡指定地より東北に約35m、環濠とは約100m離れた所にあたる。第２章のＦ－５a区は本調査区の西側約35mの所に位置している。調査区は東側に道路が沿い、道路下の沖積地（水田）をへだてて、那珂古川が北流している。調査区の標高は道路とほぼ同様で10mを測り、現在は畑地となっているが、戦前の地図では水田となっている。また、聞書きでも、30年ほど前までは、現在の標高より約１m程低く、水田がつくられていたという。発掘調査の結果の層序関係（Fig.14）も、以上の事実関係を証明している。

層序は上から、第１層　埋土層である花崗岩バイラン土で、厚さ約１m。地表部分は畑地の耕作土となっている。埋土の下、すなわち、第２層は旧水田耕作土、厚さ約30cm。第３層　黄褐色砂質土、厚５～10cm、鉄分、マンガンが集積し水田床面であることは明らかであるが、東側が厚く、西側には認められない。第４層　砂を含んだ灰褐色土、厚さ10～40cm、西側が厚く、東側が薄くなる。第５層　部分的にみられる黒色土層、厚さ10cm。第６層　第５層同様部分的にみられる黒色粘質土層、厚さ５cm前後、第５、６層は台地の落ち際にみられる層である。第７層　暗褐色土層、厚さ30～60cm。台地落ち際から東に堆積している。多量の弥生式土器や炭化米を含んでいる。調査時は開田時による客土層かとも考えたが、遺物に混じりがないことや、中世井戸が、この包含層を切って作られることを考えれば、台地上より流入堆積した層位と考えることができる。第８層　黒色粘土層　厚10cm前後、調査区東側に堆積する。第９層　地山である烏栖ローム層。第10層　八女粘土層となっている。地山面は西から東に向って傾斜しており、発掘区東側では八女粘土層が直接包含層下の表面に露出している。

調査区内で検出した遺構は、南北に流れる近世溝１条（水田の水路か？）中世の井戸１基、弥生時代の柱穴状ピット、不明土壙１基がある。遺構の残存状況や地山面の状態からみて、この地域もかな

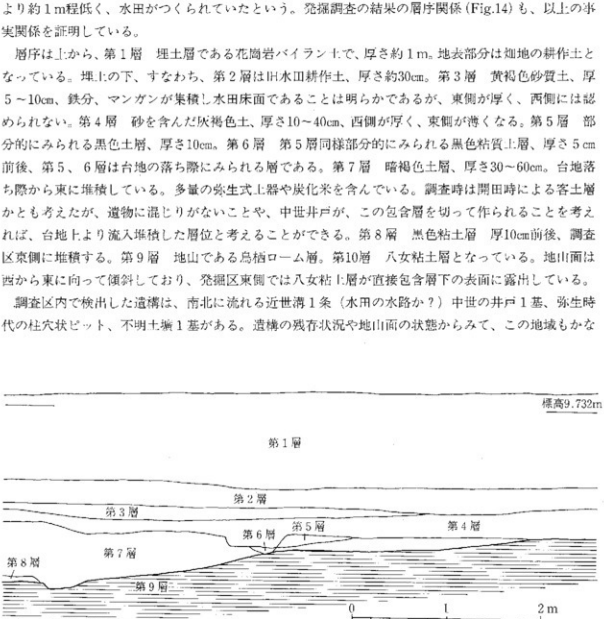


Fig.14　Ｆ－５b・区土層断面実測図

り削平されていることが考えられる。

2．遺構と遺物

(1) 土壙と出土遺物

土壙（Fig.15）

調査区の北西コーナー付近に検出した土壙である。隅丸長方形プランを有し、壁は垂直に近い角度で掘り込まれ、一部、袋状になるところもある。中央部に浅いピットが掘り込まれている。土壙は東西径129cm、南北径85cm。深さ70cm、床面はほぼ平坦である。床面中央部のピットは長径23cm、短径18cm、深さ8cmと浅い。

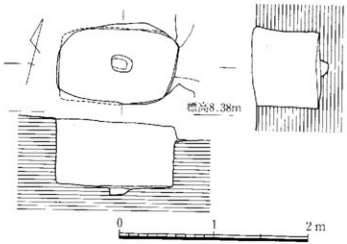


Fig.15　F－5b区・土壙実測図

この床面のピットは、この土壙の大きな特徴である。使用目的等を知る手がかりである。類例は多くはないが、弥生時代の土壙墓に同様のピットをもつ例がある。また縄文時代のおとし穴といわれる土坑にも同様の例がある。ただし、おとし穴の例のピットは深く、本例とは異なる。現時点では何であるかの判断はできないが、包含層出土土器の中に甕棺の破片を含むことや、祭祀用の丹塗り土器が多量に含まれることを考えれば、土壙墓としての可能性が強いといえる。

遺　物

本土壙の埋土中からは、弥生式土器の細片が数点出土したのみである。時期の決定はできないが、周囲の状況から弥生時代の遺構とみた方が良いと考えている。

(2) 中世井戸と出土遺物

遺構（Fig.16）

第7層の包含層面に検出した、遺物包含層、烏柄ローム層を掘り抜き、下底は八女粘土層中でとまっている。東西径89cm、南北径99cmの円形プランをなす小型の井戸である。上半部は井戸壁はやゝ傾斜しているが、下半部は直に掘り込まれている。傾斜変換部は東西径74cm、南北径66cmを測る円形プランである。床面は平坦であるが、やゝ凹凸がみられる。下半部の形状は円筒状をなし、曲げ物等の井筒のあった可能性があるが、埋土中に木質が残っているにもかかわらず、井筒の現物が遺存していないことを考えれば、元来、素掘り井戸であった可能性がより強い。埋土はいずれもレンズ状をなし、流土による埋没である。埋土層は上層より、第1層　黒褐色粘質土、厚さ75cm、北壁に片寄って黒色の炭化物層が部分的に存在する。第2層　黒色の炭化物層、厚さ3～8cmと比較的薄い。第3層、パサパサの草木の細片を含んだ黒色土層。第4層　黒褐色のワラ束状の堆積層、中央部が厚く10cm前後。第5層　土にしまりのない暗褐色土層、厚さ55cm前後、北側では黄褐色粗砂層のブロックがみられる。底部近くに小枝が遺存している。現時点では湧水はない。底に接して、ミニチュアー土器1点が出土している。

遺物（Fig.17）

井戸より出土した遺物はきわめて少ない。土器と木片等がある。弥生式土器の細片はかなり出土している。

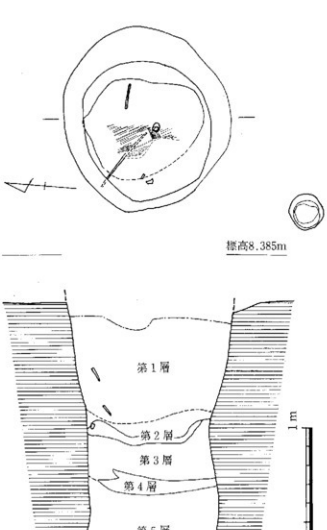


Fig.16　F－5b区・中世井戸実測図

1はミニチュアー土器である。棒状のものに粘土をまき整形して作っている。口縁部はヘラ状の工具で面とりを行ない平坦にしている。また体部外面の整形においてもヘラ状工具で削っているため、面と面の間に稜線がはいる。底部は略平坦を意識し、ととのえている。胎土には石英、長石の細い砂粒を含むが良質である。焼成は非常に良く堅緻である。器壁は厚く1cm前後である。口縁径2.6cm、器高4.0cm。2、3は高台付椀、高台は共に高く、2はや、幅広で断面は長方形をなす。3はやゝ細く外方に張る。2は高台復原径7.8cm、3は7.1cmを測る。共に胎土には石英、長石の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は2が黒灰色、3が褐色をなす。4は椀形品、口縁端部は丸くおさめる。復原口径19.8cm。胎土には石英、長石、雲母の細い砂粒を含む。焼成は良好。色調は赤褐色をなす。

(3)　その他の遺構

その他の遺構として柱穴状のピットと溝がある。ピットは8個検出した。いずれも径10～20cmで深さは数cm～10cmと浅い。組み合い建物となるものはない。溝は幅1m、深さ1m、南から順次深くなる。長さ7mにわたって確認した。溝の埋土は下層に粘質土、上層に砂層が堆積している。溝の年代は出土遺物がないので明らかではないが、おそらく中世以降であろう。水田の水路と考えられる。

(4)　包含層出土遺物

包含層からは多量の弥生式土器をはじめ磨製石斧、石包丁、石鏃等の石器類、投弾等の土製品、炭化米等が出土している。以下、代表的な遺物をみていこう。

弥生式土器の主体となるのは中期中葉から後半の土器で、一部に前期土器の小片を含んでいる。丹塗りされた土器が多く、また、甕棺の破片もあり、甕形土器にはススが付着したものが少ないなど等から、祭祀に使用された土器の一群と考えられる。

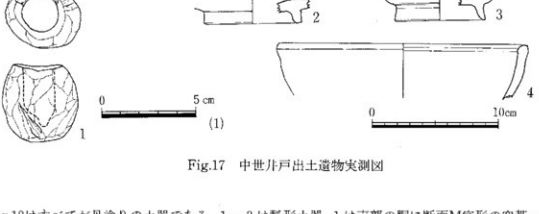


Fig.17　中世井戸出土遺物実測図

Fig.18はすべてが丹塗りの土器である。1～3は瓢形土器、1は壺部の胴に断面M字形の突帯一条をめぐらす。甕の口縁にあたる突帯は大きく外に張り、端部には斜めの沈線で刻みを入れる。2、3は頸部に断面三角形の突帯一条をめぐらす。甕の口縁にあたる突帯はやや小さくなりつつある。2、3共に壺部の胴は刷毛目を施すが、2の刷毛目はやや粗い。1が時期的には先行するものである。甕の口縁にあたる突帯の径は1が28.6cm、2が28.3cm、3が29.4cmである。4は筒形器台、脚端を欠失する。鉢が大きく外に張り、口縁はやや内傾気味にたちあがり、端部は平坦である。脚筒部はやゝしぼまりながら下方にのび脚端部で大きく広がる。9は筒形器台の脚端部か、端部がやゝ肥厚する。4は口径12.9cm、現在高42.2cm、9は脚端径30.4cmを測る。5～8は高坏形土器。共に鋤形の口縁をもつ。5　7、8は坏部破片。6は脚端部を欠失する。いずれも内外面共丹塗りである。5、7、8はいずれも口縁端部は横ナデを加え凹線を入れている。6の脚筒部は内面にしぼりの痕跡が縦線で残り、外面は縦方向のヘラ磨きを加える。復原口径は5が32.2cm、6が33.2cm、7が23.6cm、8が26.2cm、6の現存高は16.8cmである。Fig.19もすべて丹塗りの土器である。1～3、10、11は甕形土器、4は袋状口縁の長頸壺。5～8は鋤先口縁を持つ壺形土器、9は広口の壺形土器、12は甕形土器、13、14は高坏あるいは椀の脚部、15、16は壺形土器である。1～3、10～11は逆L字形の口縁を持つ。口縁端部に凹線がめぐる。内側への張り出しは小さい。口縁下に断面M字形の突帯一条をめぐらしている。1は口縁の平坦面に、暗文様の縦線を入れている。2と10は口縁端部にヘラで刻み目を入れる。10は胴部に断面M字形の突帯1条をさらにめぐらしている。11は、ほぼ完形で全形を知ることができる。底部はやゝあげ底の平底で、体部はゆるやかにたちあがり、胴はあまり張らない。口縁部の内側への張り出しはない。口端部はやゝ下り気味である。口縁下に1条、胴部に2条の断面M字形の突帯をめぐらす。復原口径は1が27.0cm、2が28.7cm、3が28.8cm、10が30.2cm、11が口径33.6cm、器高29.6cm、底部径6.0cmを測る。1～3、10、11はいずれも胎土は精選され良質で、焼成は良好、色調は黄白色をなす。4は袋状の口縁下に断面三角形の突帯1条をめぐらす。復原口径12.3cm。5～8は鋤先口縁であることは共通しているが、それぞれに形態差がある。6は口縁の引き出しがやゝ短かく、他はそれより長い。端部に凹線をめぐらすのは共通する。内側への張り出しは5が顕著である。いずれも外面は丹塗りである。復原口径は5が24.5cm、6が28.6cm、7が30.9cm、8が32.8cmを測る。9は口頸部がゆるやかに外反し、口縁端部に凹線をめぐらす。口縁径34.2cm。12は口縁が短かく屈曲し、外反する。外面と口縁部内側に帯状に丹塗りされる。復原口径19.1cm。13は脚端部破片。14は脚部、裾広がりに外にひらく。14は端部に凹線がはいる。小型であるため、高坏より脚付椀の脚部と推定される。復原脚端径は13が14.8cm、14が11.3cmを測る。15は小型の直口壺、口縁部はほぼ垂直にたちあがる。

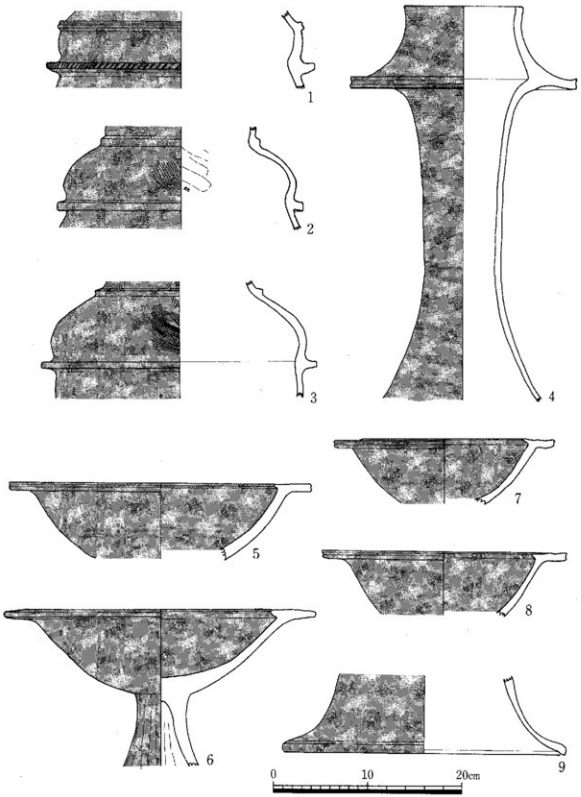


Fig.18　包含層出土遺物実測図 I

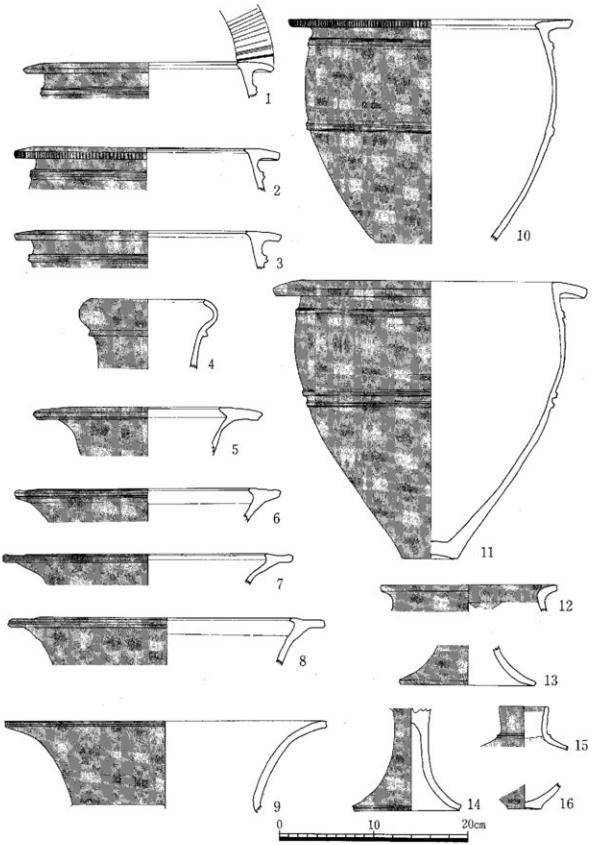


Fig.19　包含層出土遺物実測図II

頸部に断面三角形の突帯１条をめぐらす。肩部内側にはしぼりの痕跡が認められる。口径5.4cm。16は壺の底部。小型品である。やゝあげ底状をなす。底部径3.4cm。Fig.20－１～３は鍋形口縁をもった壺形土器。１は外面が丹塗り。復原口径27.6cm。２は口縁端部を欠く。頸部はまっすぐに立ちあがる。頸部に断面三角形の突帯１条をめぐらす。胴部は球形に近い。胴部内面は縦方向のヘラナデ調整。復原口径25.8cm。３も同様の器形。頸部がやゝ短かい。頸部と胴部の境の内面に指圧痕が残る。口径21.6cm。４は複胴部。胴部最大径は上位にあり、底部は小さい。底部径5.2cmを測る。５は無頸壺。口縁は屈曲して外反する。内面は横方向のヘラナデ調整。復原口径20.2cm。６、14～16は鉢形土器。６、16はほぼ同形同大。口縁部はくの字に屈曲し外反する。共に外面は縦位～斜位の刷毛目調整。復原口径は６が32.6cm、16が29.2cmを測る。14は底部は丸底。体部は半休形で口縁部は内傾する。外面は横～斜位の刷毛目調整。復原口径21.8cm。器高10.0cm。15は底部は平底。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。外面は縦～斜位の刷毛目調整。口径20.4cm。器高12.4cm。７、８、10は小型の鉢形土器である。７は底部はあげ底状をなし、体部は外傾しながら直線的にたちあがる。体部中央よりやゝ上位に断面三角形の突帯１条をめぐらす。口径11.6cm。器高6.2cm。８、10は体部は内傾気味に丸味をもってたちあがる。10は７同様に胴中位に断面三角形の突帯１条をめぐらしている。８は口径13.8cm。器高8.8cm。10は口径10.8cm、器高6.9cm。９は丸底の小型壺。内外面は斜位の刷毛目調整。胴部最大径13.8cm。11は口縁部が外反し、頸部は直線的にたち、胴はあまり張らない。内外面共に刷毛目調整である。口径11.6cm、器高9.0cm。12、13は蓋形の土器である。12は外面は斜位の刷毛目調整。13は天井部は孔があき、塞っていない。側面に相対して４個の小孔があけられている。使用目的は明らかでない。Fig.21は甕形土器。１～７は逆L字形の口縁を有する。内側への張り出しは個々において差がある。２は張り出しはなく、４、５は張り出し方がやゝ強い。１は口縁下に断面三角形の突帯１条をめぐらす。復原口径は１が31.3cm、２が33.8cm、３が33.4cm、４が32.6cm、５が32.8cm、６が33.5cm、７が32.4cmを測る。８～16は口縁部がくの字形に外反する甕形土器である。外反の度合いは個によって異なり、12、14は屈曲が著しい。15は口縁部が外傾し、直線的にのびる。端部は平坦。他は口縁端部は丸くおさめる。９は内外面共に縦位の刷毛目調整。10、12、14～16は外面が縦～斜位の刷毛目調整。10は内面が横位のヘラナデ調整。全体に土器の表面の遺存状況が悪く、調整の詳細は観察できない。復原口径は８が31.8cm、９が36.8cm、10が22.8cm、11が24.4cm、12が24.6cm、13が25.0cm、14が25.8cm、15が26.2cm、16が23.2cmを測る。１～16は共に、胎土に多量の石英、長石の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は黄褐色～赤褐色をなす。Fig.22－１は甕棺の破片である。口縁はT字形、口縁端がさがり、内側がやゝ高くなる。口縁下断面M字形の突帯１条をめぐらす。復原口径63.6cm。２～９は口縁部が逆L字形をした甕形土器。口縁端部は丸くおさめるが、張り出しの小さいもの、（４、５）や張り出しが強く、口端部が肥厚するもの（７）などがある。いずれも、口縁下に断面三角形の突帯１条をめぐらす。２、３、８は胴部が張る。４～７は胴の張りは少ない。９は張りは全くなく、鉢形をなす。復原口径は２が40.8cm、３が37.9cm、４が30.6cm、５が32.6cm、６が31.0cm、７が31.2cm、８が33.2cm、９が33.6cmを測る。１～９は共に、胎土には石英、長石の砂粒を多量に含む。焼成は良、黄褐色～赤褐色をなす。器面の状態が悪く、調整痕の観察はできない。10～12は蓋、13～15は無頸壺である。両者でセットをなす。10～12は傘形をなす。頂部は尖らずや、丸味をもつ。口縁は大きく広がり、端部は丸くおさめる。２ケ所に２個対の紐結びの小孔があけられる。共に外面は丹塗りである。10は口径13.8cm、器高2.4cm、11は口径15.4cm、12は口径17.2cmを測る。13は口縁部は強く屈曲し、口縁部がやゝ長く、端部は丸くおさめる。口縁部には蓋と対応するように孔が上から穿たれる。胴部外面は斜方向の刷毛目調整。復原口径16.6cm。14は口縁部の屈曲は13と比較し、ゆる

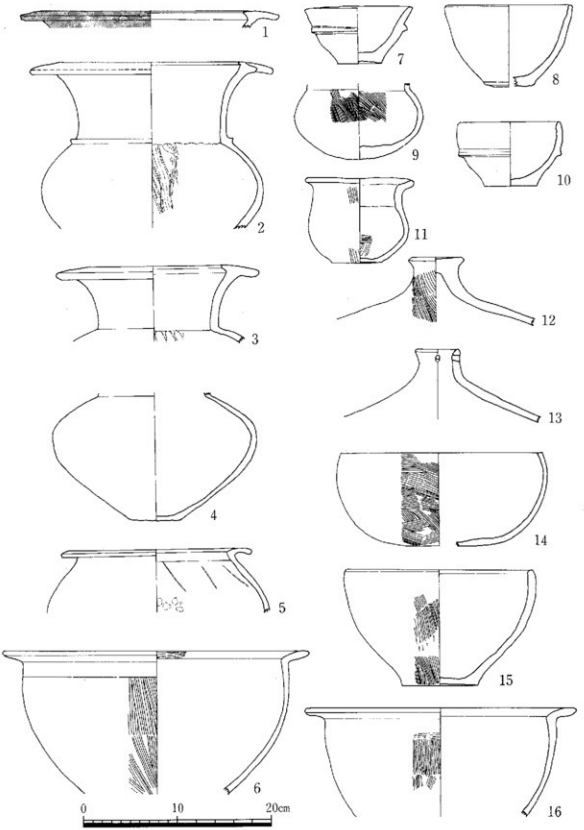


Fig.20　包含層出土遺物実測図III

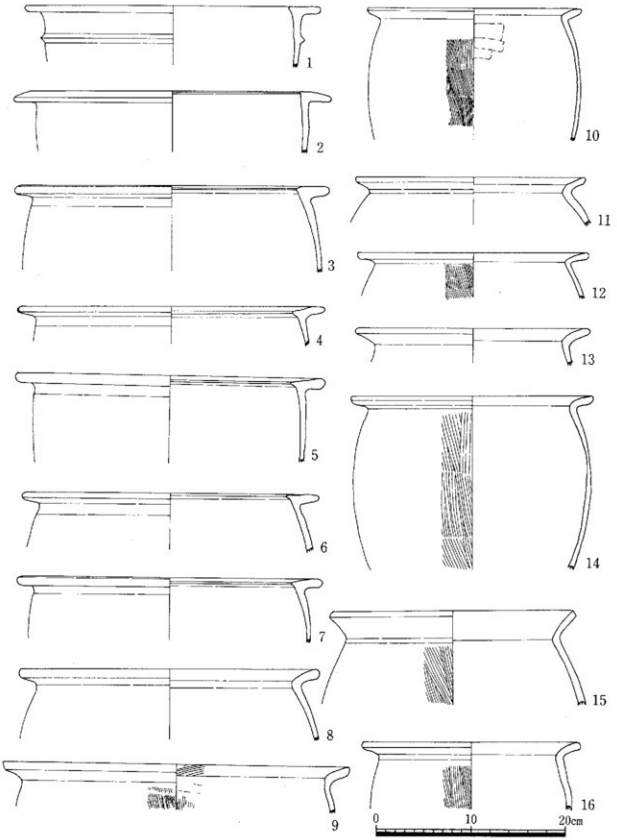


Fig.21　包含層出土遺物実測図Ⅳ

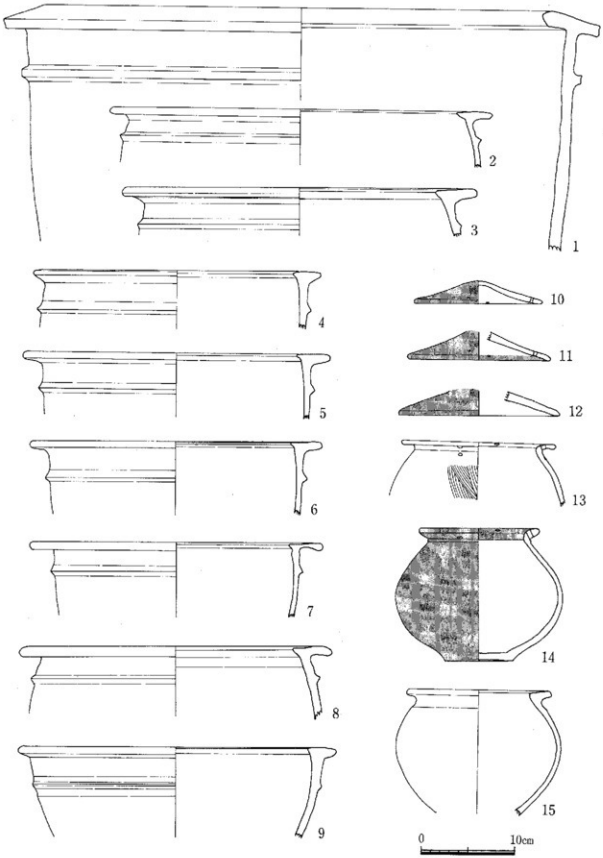


Fig.22　包含層出土遺物実測図Ⅴ

やかで、たち気味である。口縁部は短かく、肥厚する。頸部近くに上方からの穿孔がみられるのは13同様である。胴部は球形で、最大径は胴中央にある。底部は安定した平底。口径12.8cm、器高14.0cm。外面と口縁部内側は丹塗りされる。15も同様の器形であるが、口縁は鋭く屈曲し、内側に稜線をつくる。復原口径15.6cm。Fig.23は大型の甕形土器である。1は口縁は逆L字型、口縁端部がわずかに肥厚する。口縁下に断面三角形の突帯1条をめぐらす。3もほぼ同様の器形をなす。2は口縁の内側がつまみあげられ、やや上方にあがる。口縁直下に断面三角形の突帯1条をめぐらす。突帯以下の外面は縦～斜位の刷毛目調整を加える。4は口縁はほぼ水平である。前者同様に断面三角形の突帯1条がめぐる。5は口縁端部がやゝあがる。6は口縁端部があがり、内側の張り出しも強く、T字形口縁をなし、直下に断面三角形の突帯1条をめぐらす。4、6の外面は縦位の刷毛目調整。7も6同様に口縁端があがり、端部は平坦に仕上げる。内側の張り出しは6に比較し小さい。口縁下に断面三角形の突帯2条をめぐらす。復原口径は1が42.0cm、2が45.0cm、3が42.0cm、4が49.6cm、5が38.2cm、6が40.8cm、7が44.8cmを測る。いずれも胎土には石英、長石の砂粒を多量に含む。焼成は良好。色調は黄褐色～赤褐色をなす。器面の保存状態が悪く、内外面の調整痕は観察が困難である。Fig.24は小型の甕形土器である。いずれも逆L字形の口縁をもつが、それぞれに若干の差異がある。1、9は内面の張り出しが貼付け状をなし、下に明瞭な段を形成する。9は口縁が非常に薄いことも特徴であろう。共に外面は縦位～斜位の刷毛目調整である。2、3は口縁内側が上方につまみあげられる。3は外面は斜位の刷毛目調整。4～6は口縁がわずかにあがるタイプ。5は外面に縦位の刷毛目調整が施される。7は口縁が短かく肥厚する。8、10～12は口縁がほぼ水平、肥厚せず端部は丸くおさめる。10は口縁内側が小さくつまみ出される。14、15は口縁は薄くて短い。内側が比較的強張される。16は口縁端部を失う。やゝ胴が張る。復原口径は1が27.8cm、2が31.0cm、3が37.4cm、4が31.0cm、5が31.5cm、6が29.8cm、7が29.6cm、8が30.4cm、9が26.2cm、10が27.2cm、11が25.2cm、12が26.2cm、13が27.6cm、14が22.0cm、15が15.8cm、16が20.0cmを測る。いずれも胎土には石英、長石等の砂粒を多量に含む。焼成は良好で、色調は黄褐色～赤褐色をなす。甕形土器の大部分は器面の保存状態が悪く、器面の調整痕の観察が良くできないが、数点の土器にみられるように、外面は縦～斜位の刷毛目調整が施されていたとみられる。Fig.25の1～6、13は外面は丹塗りされている。1、2は無頸壺、1は大型品で珍らしい。復原径26.6cm、口縁部は鋭く屈曲し、内側に稜線をつくる。口縁端部は丸くおさめる。胴部はかなり張るものであろう。口縁には蓋と紐で結ぶための小孔が2個づつ対で穿孔される。2は小型品、球形の胴部であるが、口縁部と底部を失う。胴部最大径9.8cm。2は椀か6のような脚付椀とみられる。胴部は半球状をなし、口縁端部は丸くおさめる。復原径11.2cm。6は脚付椀、脚部と口縁部を失う。体部は半球状をなす。3と同様の器形になるとみられる。推定復原口径は12.5cm前後である。4、5は丹塗りの甕形土器の底部である。4はあげ底状になり、やゝ厚い。体部は大きく外傾しながらたちあがる。5は4同様にあげ底状になるが薄い、体部は同様に大きく外傾しながらたちあがる。4は底部径6.8cm、5は8.2cmを測る。1～6は　胎土は精選されて精良、焼成は良好で、丹塗り下の色調は白黄色をなす。13は壺形土器である。底部は安定した平底で、体部は外傾しながらたちあがるが、胴の張りは強くない。頸部と胴部の境に断面三角形の突帯1条をめぐらす。丹塗りの下に斜位の刷毛目調整が若干残る。胴部最大径は胴中位にあり16.8cm、底部径8.2cm、頸部までの高さは13.4cmを測る。7～22は底部破片、22の壺形土器の底部を除いて、他はすべて甕形土器の底部である。7は底部が台状に高くなり、あげ底をなす。8、9は7より低いが同様に台状をなし、あげ底の状態は7より深い。10、11はさらに低くなり、若干あげ底状をなす。12は底部の周囲が環状になり高台状である。共に外面には縦～斜位の刷毛目調整が施される。14～21は安定した平底。16がやゝあげ底状

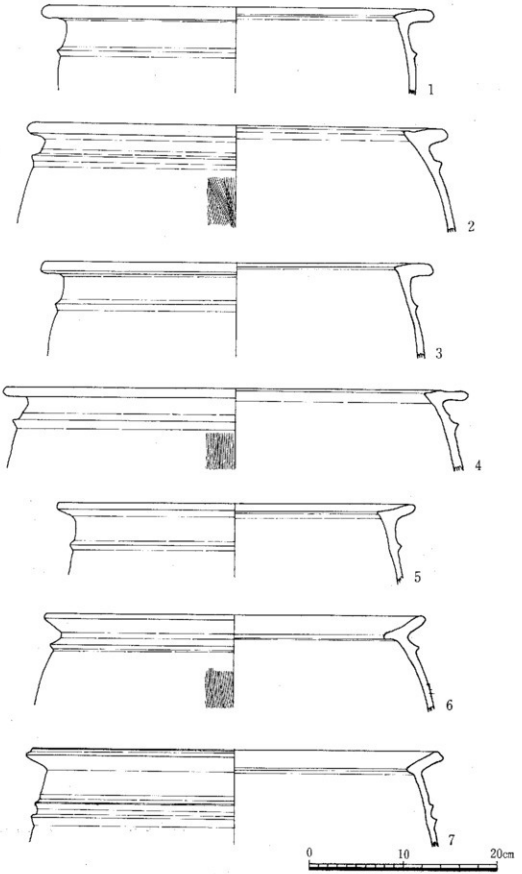


Fig.23　包含層出土遺物実測図VI

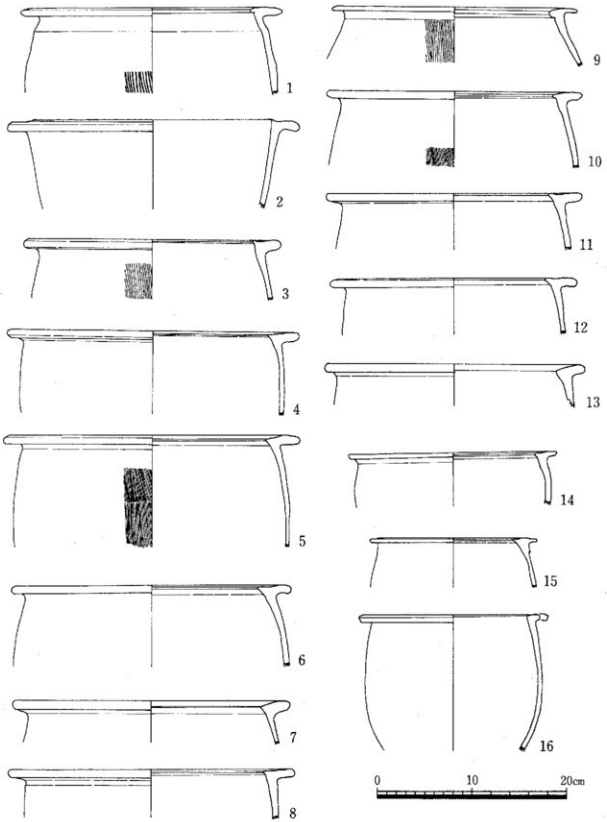


Fig.24　包含層出土遺物実測図Ⅶ

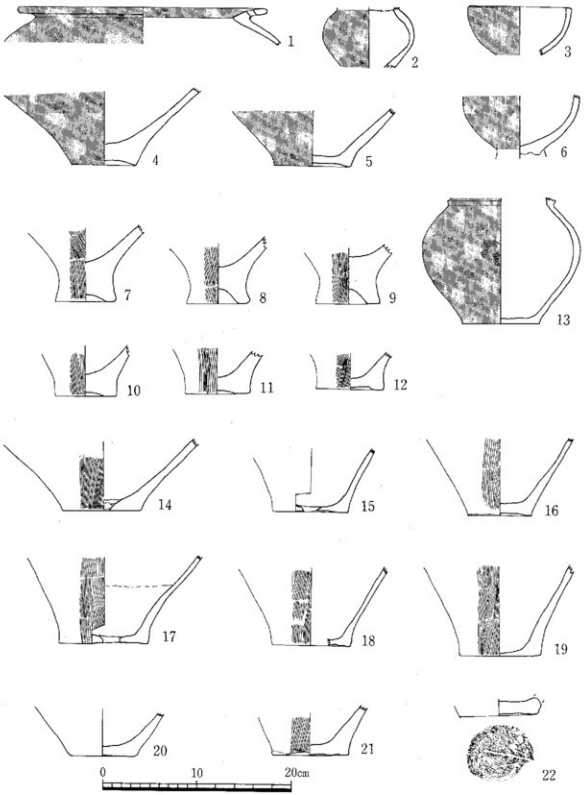


Fig.25　包含層出土遺物実測図Ⅷ

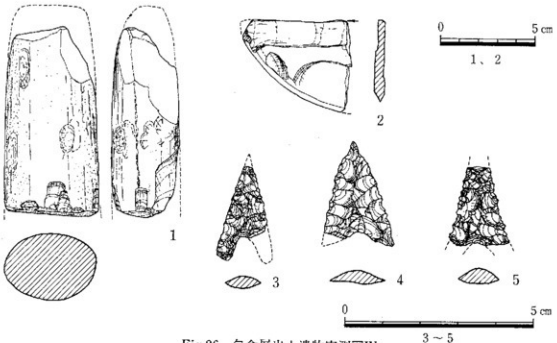


Fig.26　包含層出土遺物実測図IX

になる。体部は外傾しながらたちあがる。14のように大きく外傾するものもある。14、15、17は外底部から打撃を加え穿孔している。14、16～19、21は外面に縦～斜位の刷毛目調整を加えている。22は外底部に木葉痕が残る。底部径は14が8.4cm、15が8.0cm、16が6.8cm、17が9.8cm、18が8.2cm、19が8.8cm、20が6.8cm、21が8.2cm、22が8.4cmを測る。

Fig.26は石器類である。1は今山産の玄武岩を利用した磨製石斧である。刃部が半折した後、石槌として利用されている。現存長10.2cm、幅4.9cm、厚さ3.7cm、2は石庖丁の破片、頁岩を利用する。刃部は両面から研磨される。節理よって石が剥離するために薄くなる、現存長5.8cm、幅5.0cm、厚さ0.6cm。3～5は打製石鏃、共に黒曜石を素材としている。3、5は黒色、4は白灰色をなす。丁寧な剥離を加え整形している。製作技術からみれば、縄文時代に属するものである。

この他、土製品として投弾が6個あるが、いずれも破片である。

第４章　Ｆ－６b区の調査

１．調査区の位置

本調査区は板付５丁目４－３に所在する。この調査区は、板付台地の東側端で、新たに建設された県道のすぐ北側に隣接している。かっては土取りのため低くなり、水田となっていた所である。台地とは約１m前後の比高差があったが、数十年前に埋めたてられ、広場となっていた。大正５年、銅剣、銅矛各３口が出土した田端遺跡に比定されている地区である。報告者である中山平次郎博士は、次のように報告している。「鉾及剣発見の局部は博多より太宰府に到る国道に沿へる板付新町より南折し、田端村落に入らんとする小路東側に位せる、陸地測量部地図中神社符号の記入せられたる地点にして、近年迄此部には地祿天神社存したりといふ。田端民居の地盤は概して周円の田地面より高き事一間内外にして、以上の社地は田端民居の一般地盤より高かりし由なりも、今は全然掘除せられて周円の地

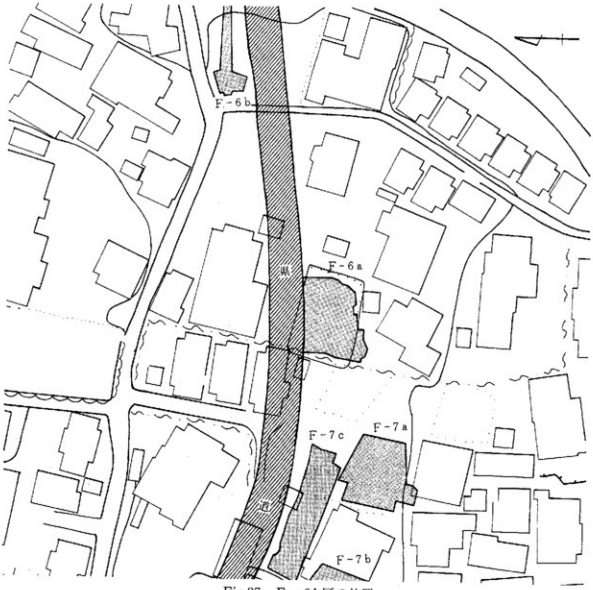


Fig.27　Ｆ－６b区の位置

盤より却て低く其一端に高さ4、5尺許なる小崖面を遺せるに過ぎずして、此残土も逐次掘除せられつゝあり、土層としては下に自然の赤土層を露はし、上に薄き覆土を示せり。村人の語る処に從へば、以上の社地は元来二畝餘の広さに於て田地面より一丈餘の高さを保ちたる円墳状隆起として存せしが如く、道路に接せる北及西の両側甚だ急に、又田圃に面せる南及東の両側に、少しく緩に、比南側より神祠に登るべく石段無き小路を通し、祠は南方に向ひたりといふ。」 トレンチ調査の結果は、中山報告どうりに大きく削平され、一部には八女粘土層が露出していた。甕棺墓群の存在を示す証拠は全くなく、遺構から田端遺跡の所在地の確定は困難であったが、試掘トレンチで確認した近世の溝の配置が、平山半次郎氏の見取図と完全に一致することを確認した。よって、この地区が田端遺跡であることは疑いない。試掘トレンチの両側で弥生時代の井戸1基を検出した。この井戸と田端遺跡の墳丘らしき部分との位置関係は明確にしがたいが、両者の時期関係を考慮すれば相互に重複することはないと考えた方が、より妥当性がある。よって、田端遺跡は、この井戸より、更に東に存在したと推測することができる。

2．遺　構

本調査区は前節で述べたごとく、田端の甕棺墓群（墳丘墓か？）があったことは疑いないが、種々の土木工事に伴う土取りが進められたため、大きく削平され、遺構はことごとく削滅し、調査区西側において井戸1基を確認したにすぎない。

井戸は鳥栖ローム層面において確認したが鳥栖ローム層の厚さは約10cmで、すぐに八女粘土層に移行するので、その削平の激しさがわかろう。井戸の検出時の平面形は、やゝ弧線に乱れがあるものの径約1.1mの正円形をなす。鳥栖ローム層と八女粘土層の境は、第1の湧水点なり、湧水のため壁が崩落し拡大している。この部分は袋状になり長径約1.5m、短径約1.3mの不整楕円形状をなしている。崩落部以下の八女粘土層部分は径約1mの円筒状をなし、検出面から約1.8mの所で青灰色砂層に達し、この部分が、この井戸の主たる湧水点となっている。井戸の底部はやゝ尖り気味に掘削されている。井戸の現状の深さは約2.2mであるが、上部の削平を考慮すると、元来は4m以上の深さを有していたと考えられる。

井戸の埋土は、いずれもレンズ状をなしているので、流土の流れ込みよる自然堆積と認めることができる。埋土層は上から、第1層、黒褐色粘質土層、厚さ約30cm。第2層　鳥栖ローム層の崩落土、厚さ5～10cm、西側には堆積がみられない。第3層　鳥栖ローム層を多く混じえた黒褐色土層、厚さ20～30cm。第4層　八女粘土が混入した黒褐色土層、厚さ20～25cm。第5層　東壁に接して部分的に堆積する土層、鳥栖ロームを混じえた黒褐色土層、厚さ約30cm。第6層　ほぼ水平に堆積する黒褐色粘質土層、厚さ25～30cm。第7層　西壁に部分的にみられる八女粘土層の崩落土でブロック状をなす。第8層　灰褐色粘質土層、西側からの流土か、東側は堆積が薄い、厚さ10～20cm。第9層、東壁に接して部分的に堆積する土層、鳥栖ローム混じりの灰褐色土層、厚さ15～20cm。第10層　西側半分に堆積する層である。八女粘土層の再堆積である。厚さ4～7cm。第11層　ほぼ第10層と同様の範囲に堆積している。灰褐色粘質土層で、厚さ5～17cmである。第12層　八女粘土層の崩落再堆積土で、厚さ3～30cm、西壁の崩落に伴うものか、西壁側が特に厚い。第13層　八女粘土を混じえた灰白色土層、厚さ10～20cm。第14層　八女粘土層の崩落再堆積土層、厚さ10cm前後。第15層　井戸の最下部に厚く堆積した灰白色粘質土層である。厚さ55～65cm。

これら井戸内の堆積土中には4回（4面）にわたって完形に近い丹塗りの袋状口縁壺、広口壺、甕

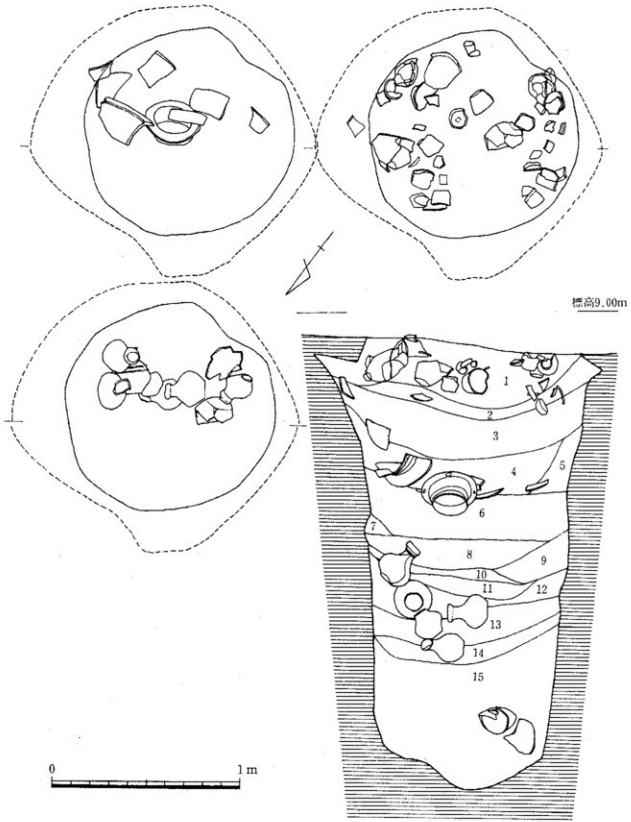


Fig.28　F－6b区・井戸実測図

形土器をはじめとした祭祀用の土器が埋没している。このような状況は、弥生時代の井戸では珍らしいことではなく、井戸祭祀として認識されているが、4面という回数の多さ、その時間的幅の問題で注目される。以下、各面の土器の出土状況の概略についてみていこう。

第1面は、最下層の第15層の下半に認められる。西側に片寄って、2個体の丹塗り袋状口縁壺がある。井戸底とは約20cm浮いているので、井戸使用開始から、しばらくの時間経過があった後の行為と認められる。第2面は、第14～8層間に認められる土器群である。5個体の丹塗り袋状口縁壺、2個体の甕形土器、1個体の壺から構成されている。約60cmの間に重なりあっているので、時間的に接近した数回の行為を示すものと考え得るが、その区別は困難である。第1面とは25cmの間隔があいている。第3面は、第6～4層中に認められるが、出土状況からすれば、第4層の堆積中に行なわれた行為とみられる。鋤先口縁をもった大型の広口壺3個体から構成されている。第2面との間隔は約20cmを測る。第4面は第2～1層中に認められるが、出土状況からみて、行為が行なわれたのは第1層の堆積中とみられる。下層土器の大部分が丹塗り土器であったの対して、この面の土器には丹塗りはほとんど認められない。甕、広口壺、鉢等、16個体前後から構成される。いずれも小型品であることが注目される。第2面との間隔は約30cmを測る。

3．遺　物

井戸の出土遺物は前述したように4面に別かれて出土している。以下、上面の土器からみていくことにする。

4面出土土器（Fig.29）

17個体の土器がある。ほとんどの土器は、その全形を知ることができるが、完形品はない。甕、鉢、高坏、壺があるが、いずれも小型品である。高坏の1点を除いて丹塗り土器はない。

1～3は同形の広口直口壺である。扁平な球形の胴部から頸部が直立し、口縁は外側に屈曲し、逆L字形をなす。2は頸部に断面三角形の凸帯一条をめぐらしている。1は胴部外面はヘラ工具による縦方向の荒い研磨、内面は凹凸があるが部分的に刷毛目調整痕が残る。頸部内面には縦位に指圧痕が顕著に残っている。1/3を残す破片である。口径12.7cm、器高10.6cm。2は口頸部の一部を欠く。外面の頸部から胴部にかけて縦位の刷毛目調整が丁寧に施され、文様効果を出している。頸部の突帯は刷毛目を施した後に貼り付けられたもので、貼り付けの際の横ナデによって刷毛目痕が消えている。口縁部から内面にかけては横ナデ調整。突帯の一部に丹の雫が落ちている。口径15.7cm、器高12.9cm。3は頸部から胴部にかけての外面は縦位の単位8～9本の粗い刷毛目調整を施す。内面には指圧痕が多く残り、その上に刷毛目調整を施す。胴下半は縦位、頸部は横位の刷毛目調整である。口縁部は横ナデ調整である。口径20.5cm、器高19.9cm、前二者に比較して大型品である。共に胎土には石英、長石、黒雲母、金雲母、赤色鉱物の砂粒を混入しているが良質。焼成は良好、色調は1が黄褐色～赤褐色、2が赤褐色～灰褐色で、胴下半の一ケ所に黒斑がある。3は暗褐色で、2同様に黒斑がある。4は小型の壺形土器、約1/3を欠損する。頸部はしぼりが加えられ、内面には縦のしわがよっている。口頸部は直立し、口縁部は外側からナデを加えおさめるため、内側にわずかな張り出しがみられる。頸部と胴部の粘土接合部は、板付Ⅰ式土器の小型壺と同様で、内傾に接合されるため、接合部に段を生じている。胴部最大径は肩部にあり、肩が張る。胴内面は粗い縦のヘラ調整である。胎土には石英、長石の砂粒を多量に含み、粗悪。焼成は良好。色調は黄灰白色～赤褐色、1ケ所に小さな黒斑がある。口径5.4cm、器高11.2cm、底径5.0cmを測る。5～7、10～12は小型の鉢あるいはコップ形の土器である。

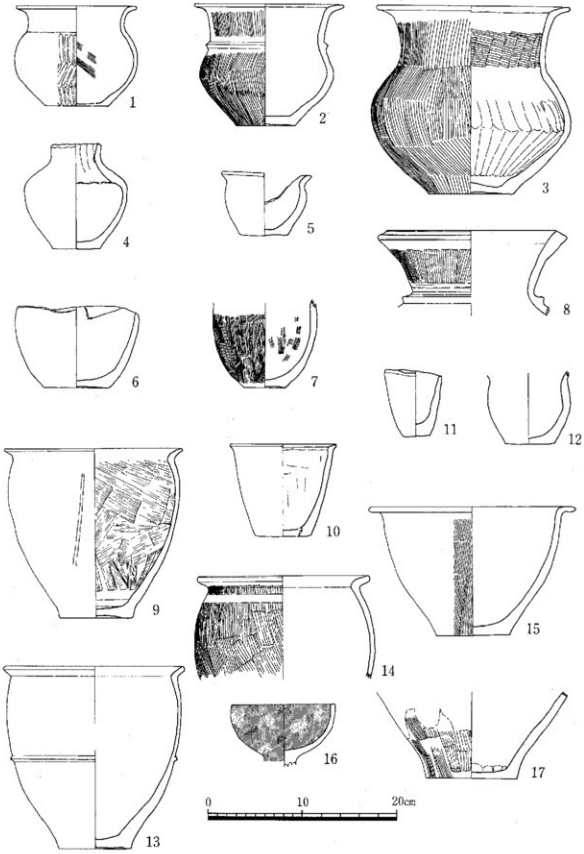


Fig.29　井戸出土遺物実測図 I

5は平底の底部で、体部はやゝ丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。外面下半は擦痕、粗い刷毛目痕が残る。内面は指調整。口縁部内外面は横ナデ調整。口径9.5cm、器高6.6cm、底径5.1cm。6は口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形である。口縁はひずみが著しい。手づくねの土器で、内外面共に指による調整後、外面は縦位のヘラナデ、内面は横位のヘラナデを施す。胴上位に1ケ所の黒斑がある。口径12.8cm、器高8.5cm、底径6.9cm、7、12は平底で、胴部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反するが共に欠損する。7は外面が縦位の刷毛目調整、内面が縦位の刷毛目調整後、ヘラナデ調整を加えている。12は内外面共に指によるナデ調整を加えるが凹凸が顕著である。7、12共に粗雑なつくりである。7は底径4.6cm、12は底径5.4cm。10、11はコップ形をなす。10は平底で、体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部が屈曲し、外に張り出す。外面下半は縦位のヘラナデ状の研磨、上半は横位のヘラナデ調整。内面は指による調整後、縦位のヘラナデ、口縁部は横位のヘラナデ調整であるが粗雑なため凹部には指紋が明瞭に残る。底部付近に黒斑がある。口径11.2cm、器高9.8cm、11は平底で体部は外傾しながら直線的にのびる。外面は棒状工具で調整するが粗い。内面は指による押圧調整、体部に黒斑がある。口径6.2cm、器高7.1cm、5～7、10～12は共に、胎土に多量の石英、長石の砂粒を含む。焼成は良好、色調は黄白色～赤褐色をなす。8は広口壺、頸部と胴部の境に断面三角形の突帯1条をめぐらす。口頸部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部にむかって肥厚する。頸部は縦位の刷毛目調整、口縁部内外面、突帯の上下は横ナデ調整である。胎土には石英、長石の砂粒を若干含むが精良、焼成は堅緻、色調は灰白色をなす。口径20.0cm、9、13、14は甕形土器、いずれも口縁部は外反し、いわゆる「くの字形」口縁である。9は口縁部の内外面は横ナデ調整。外面はヘラおよび棒状工具による縦位のナデ調整であるが、下半部の一部がヘラ削り状になるところもある。内底部は指による調整で凹凸がある。内面下半は縦位、上半部は斜位の丁寧なヘラナデ調整、口縁部から胴下半にかけて1ケ所大きな黒斑がある。口径18.9cm、器高18.0cm、底部径7.8cm。13は胴中位に断面三角形の突帯1条をめぐらす。内外面共に縦位のヘラナデ調整で、口縁部付近は横ナデ調整である。口径19.1cm、器高19.4cm、底径7.6cm。14は胴が膨む。胴外面は縦位の刷毛目調整、口縁部は内外面とも横ナデ調整。胴内面は指ナデ調整であるが器面の凹凸が顕著である。口径18.3cm。9、14は胎土に石英、長石の砂粒を若干含むが良質。13は砂粒を多量に含み不良、焼成は共に良好である。色調は9が灰褐色、13が黄褐色、14が赤褐色をなす。15は鉢形土器である。口縁部は逆L字形をなす。外面は粗い縦位の刷毛目調整。内底部は凹凸が著しいが、内面はヘラナデによって調整している。口縁部の内外面は横ナデ調整。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒が混入されるが精良、焼成は良好で、黄褐色をなす。胴下半から底部にかけて黒斑がある。口径22.0cm、器高13.7cm。16は脚付椀、脚部を欠損する。椀部は半球状をなし、口縁部は平坦に仕上げている。内外面共に横方向の丁寧なヘラ研磨が施され、丹塗り後、さらに黒色顔料を塗布している。胎土には砂粒を混入しているが精撰された良質のものである。17は壺の底部と考えられる。外面には丁寧に縦位の刷毛目調整が施される。内面は指調整、胎土には石英、長石の砂粒を含む。焼成は良好、色調は黄褐色～黒褐色、外面の底部付近に黒斑がある。底径9.8cm。

3面出土土器（Fig.30　31－10）

3個体の壺形土器と1個体の甕形土器がある。いずれも鋤形口縁をなす丹塗り磨研の土器である。1は口頸部の破片で、胴部以下は欠失する。口縁平坦面には13～14cm間隔でU字形の浮文が貼付される。頸部には断面M字形の突帯が4条めぐらされる。丹塗りの範囲は口縁平坦部から外面で、頸部内面にはみられない。頸部内面は外面に比較し、保存状態が悪く、荒れている、口径43.0cm、胎土には石英、長石、金雲母、黒雲母の砂粒を含む。焼成は良好で、外面は丁寧な丹塗りで赤色、内面は黄褐

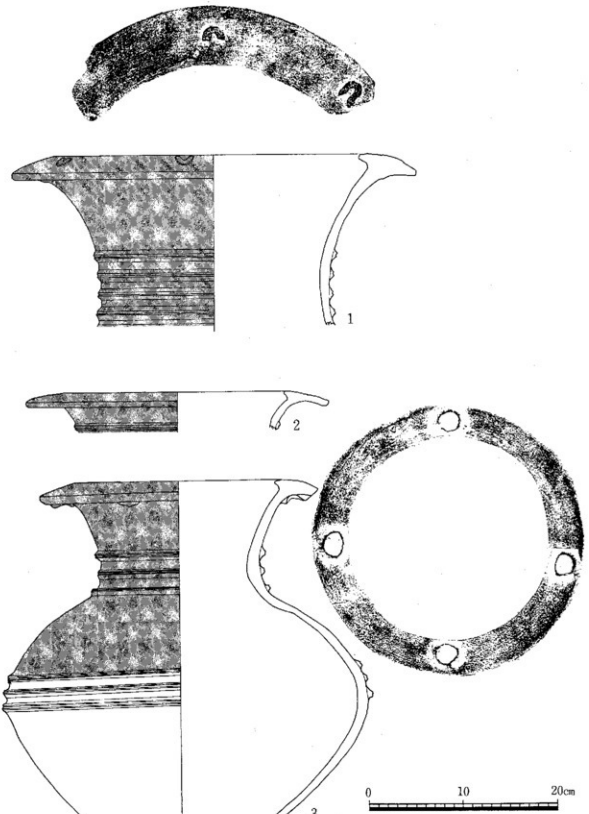


Fig.30　井戸出土遺物実測図II

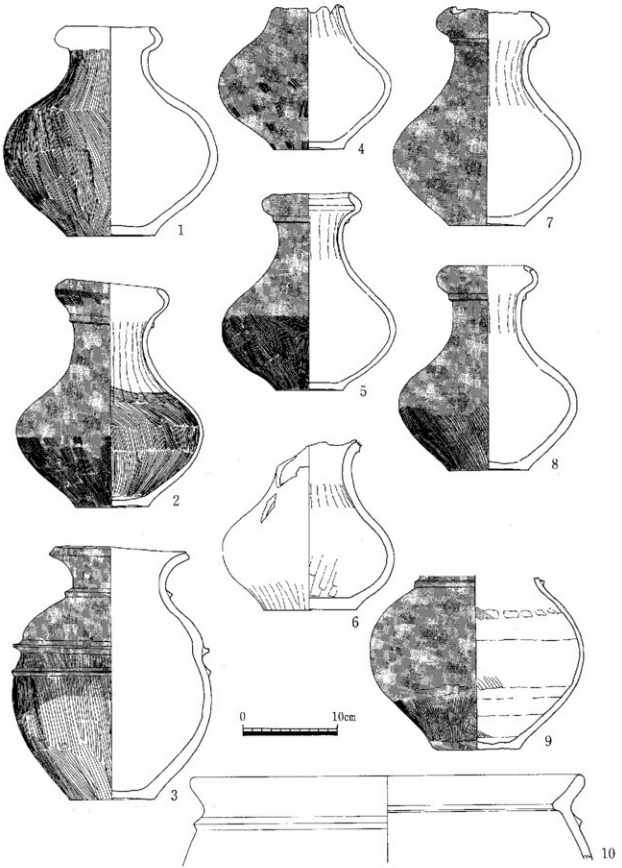


Fig.31　井戸出土遺物実測図Ⅲ

色をなす。2は頸部に断面M字形の突帯一条をめぐらす。内外面共に焼成後の丹塗り磨研であるが丹の剝落が著しい。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を含むが精撰され良質、焼成は良好、色調は丹塗り下は黄褐色～赤褐色をなす。3は底部を欠損するが、ほぼ全形が明らかである。口縁下面の平坦部に4分割するように円環状の浮文が貼付される。また、頸部と胴部に各三条、断面M字形の突帯がめぐる。丹塗り磨研の範囲は、胴部の最上の突帯より上の口縁平坦部までで、胴下半、内面には及ばないが、流状に点々と付着する部分がある。胴下半部から内頸部にかけては横ナデ調整、胴下半部は縦位のヘラナデ状の調整である。内面は外面に比較し、器面の保存状態が悪く荒れている。胎土には石英、長石の砂粒を多量に含み良質ではない。焼成は良好。色調は外面上半が赤色、下半が黄褐色、内面は黄褐色～黒灰色をなす。口径29.8cm、胴部最大径39.3cm、器高41cm前後と推定される。Fig.32－10の甕形土器は甕棺の破片と考えられる。復原口径41.4cm、口縁部はT字形口縁が変形し、口縁端があがり、全体としてくの字口縁に変化している。内傾への張り出しは小さい。口縁直下に断面三角形の突帯1条がめぐる。内外面共に横ナデ調整。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を含む。焼成良好で黄褐色をなす。

2面出土土器（Fig.31－1、3～7、9、Fig.32）

8個体以上の土器から構成される。袋状口縁壺5個体、甑形土器2個体、壺形土器1個体がある。いずれも、ほぼ完形を保っている。1は袋状部の一部を打欠いただけである。袋状部はやゝ低く、横に張り出す。口縁部内外面は横ナデ調整、頸部から下は縦位の丁寧な刷毛目調整を施す。頸部内側にはしぼりの痕跡がある。胎土には石英、長石の砂粒を多量に含み、やゝ不良、焼成は良好で暗赤褐色をなす。胴と胴部から底部にかけての2ケ所に黒斑がある。口径9.4cm、胴部最大径22.7cm、底部径9.2cm、器高22.2cm。丹塗りはみられない。3は甑形土器。突帯の一部を打欠くのみで完形である。口縁部は外側に開く、頸部と肩部の境に断面三角形の突帯一条をめぐらす。肩部の張りは小さく、本来の壺の姿をかろうじて留めている。胴上位に断面長方形と三角形の突帯各一条をめぐらしている。胴上半から口縁部内面にかけて横ナデ調整、下半の本来甕にあたる部分には縦位に粗い刷毛目調整を施す。胴の下方の突帯よりや、下方から口縁内側にかけて丹塗りされているが発色が悪く、やゝ黒ずんでいる。胎土には石英、長石の砂粒を混入しているが良質、焼成は良好で、丹塗りのない部分は黄褐色～赤褐色をなす。口径13.9cm、底部径8.8cm、器高26.9cm、胴部最大径はやゝ下位にあり21.0cmを測る。4は口頸部を欠損する。胴部上半から頸部にかけては横ナデ調整。胴下半は縦位の刷毛目調整を施すが、後のナデによって消えかけている。頸部内側にはしぼりの痕跡が縦線として残っている。外面は丹塗り。底部は中凹みのあげ底状をなす。胴部最大径は中位にあり18.2cmを測る。底部径9.5cm。胎土には石英、長石等の砂粒を混入する。焼成は堅緻、赤褐色をなす。5～7は口縁部と頸部の境に断面三角形の突帯一条をめぐらし、長い頸部はゆるやかに変化し、胴部との境は不明瞭、胴部最大径は胴中位にある。5は口縁部から頸部にかけて、6は口縁部、7は口縁の一部をそれぞれ打欠かれているが、ほぼ完形である。5は胴上半部から口縁部内側にかけては丁寧な横ナデ調整。胴下半は細い刷毛目調整を斜位～縦位に施す。頸部内側にはしぼりの痕跡が縦線で残る。胴下半内側も縦位の刷毛目痕が残るが、大部分はナデ消される。胴中位に横長の黒斑がある。6は胴上半から頸部にかけて横ナデ調整、胴下半部は縦位のヘラナデの痕跡が顕著に残る。頸部内側にはしぼりの痕跡が残る。器壁が厚く、他の土器に比較し重たい土器である。7は全体に丁寧な調整で仕上げるが、胴下半にヘラ磨き状の縦位の調整痕がみられる。5、7は外面全面から内面にかけて丹塗りが施される。5～7は共に、胎土には石英、長石等の砂粒を多量に含む。焼成は良好、色調は黄褐色である。5は口径8.2cm、胴部最大径18.4cm、底部径7.1cm、器高26.9cm、6は胴部最大径18.1cm、底部径9.8cm、推定器高20.0cm前後、7

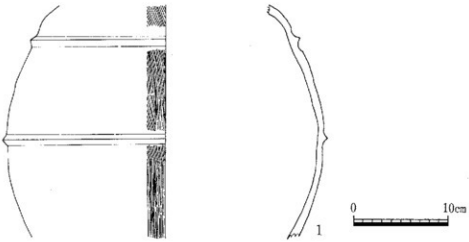


Fig.32　井戸出土遺物実測図Ⅳ

は口径8.6cm、胴部最大径18.4cm、底部径7.1cm、器高20.8cmを測る。９は口頸部を欠損する。広口壺と考えられる。頸部と肩部の境に断面三角形の突帯一条をめぐらす。胴部は縦位の刷毛目調整を施した後、上半部に横ナデを加えて刷毛目痕を消している。内面は一部に刷毛目調整痕が残り、一部指圧痕も残っている。外面は丹塗りであるが剥落が著しい。胎土には石英、長石の砂粒を多量混入する。焼成良好、色調は白灰色～赤褐色をなす。Fig.33－１は瓢形土器である。口縁部、底部を欠くため全形は知りえない。胴部に断面三角形の突帯二条を約10cmの間隔でめぐらしている。壺部と嚢部の境が不明瞭であるが、肩部のカーブの形状から瓢形土器と知ることができる。この種の土器では最も退化したものであろう。外面には縦位の刷毛目調整が施される。内面はナデ調整であるが、剥落が多く不明瞭。胎土には石英、長石等の砂粒を混入している。焼成は良好で、暗褐色をなす。

一面出土土器〔Fig.31－２、８〕

袋状口縁壺２個体がある。いずれも外面と口縁部の内側に丹塗りを施している。袋状口縁と頸部の境に断面三角形の突帯一条をめぐらしている。２は口頸部、胴の一部、８は口頸部の一部を欠損しているが、ほぼ完形で全形を知ることができる。共に外面は縦位の刷毛目調整を施した後、胴上半から口縁内側にかけて横ナデ調整が加えられ、刷毛目痕を消しているが、２には口縁下半にも刷毛目痕が残る。頸部内側にはしぼり痕が縦線となって顕著に残っている。８は内面の調整は明らかでないが、２の胴下半内側は放射状にかきあげた粗い刷毛目調整で、上は横位の刷毛目となる。共に胎土には石英、長石等の砂粒が混入される。焼成は良好、色調は２が赤褐色～白灰色、８が黒灰色をなす。２は口径9.6cm、胴部最大径19.8cm、底部径7.6cm、器高23.7cm、８は口径8.2cm、胴部最大径18.8cm、底部径8.4cm、器高21.8cmを測る。

第5章　若干のまとめ

ここで、発掘調査を実施した3ヶ所の調査区の成果をまとめることにする。3ヶ所の調査区はいずれも、台地上に立地し、台地中央部の環濠をとりかこむ位置にある。

成果の一つは、前期遺構の広がりを確認できたことである。F－5a調査区で検出した3基の貯蔵穴は削平され、底の数10cmを残すのみであるが、出土遺物や状況から、いずれも前期初頭に位置づけられる。環濠の北東部では初めての発見である。環濠の周辺では、貯蔵穴はいずれも南側に集中して確認されており、今回の発見から、集落内における生活のあり方に若干の修正が必要である。とはいえ、貯蔵のあり方としては、環濠外の南側、環濠と弦状濠に囲まれた一画、環濠北側の板付小学校校庭に集中しており、その大勢には大きな変化はない。なお、第2号貯蔵穴から出土した板付Ⅰ式土器の小型壺は、2個共に完形品であり、同時期の完形資料の少なさから、好資料を増加させたことはよろこばしい事である。ただ、これらの土器が完形で貯蔵穴より出土した状況は注意を要する。第2号貯蔵穴は諸条件から完掘することができず、その全形を知ることができないが、床面にさらに一段掘り込まれた土坑があることが注意される。視点を変えれば、この貯蔵穴を土壙墓とその掘り方とみることも可能であるが、決定するにはいたらない。

第2の成果として、前述した貯蔵穴が土壙墓である可能性を含めて、F－5a区で検出した土坑1基、F－5b区で検出した土坑1基が、その形状等から土壙墓あるいは木棺墓と考られることである。副葬品等がなく、時期も決定できないが、その可能性は強い。史跡指定地内の遺構確認調査では、両調査区に近い史跡地内北東部で金海式の甕棺墓1基が確認されている。また、F－5b調査区の包含層からも中期の甕棺の破片が出土し、丹塗りの祭祀用土器が多量に出土している。これらからこの地域に前期～中期にかけての墓地が形成されていたことは疑いないが、通常の墓地のように墓が密集するのではなく、かなり希薄であったことが推測される。

第3の成果として、F－5b調査区の多量の中期土器資料の存在である。丹塗りの祭祀用土器は甕形土器をはじめ、袋状口縁壺、鋤先口縁の広口壺、広口壺、直口の小型壺、無頸壺とその蓋、高杯、ひさご形土器、大型の筒形器台等がある。以上の丹塗り土器のセットは、甕棺墓地の祭祀用ピットから、しばしば発見されており、F－5b調査区の丹塗り土器も、前に指摘したように、甕棺の破片等もあり、墓地に対する祭祀に使用された可能性は強い。ほぼ、完形に復原できる遺物を含んでいることも補強の材料となろう。甑形土器は壺形土器と甕形土器が合体したものであり、F－5b調査区だけでなく、F－6c調査区の井戸出土品中にも完形品がある。それぞれの検討から、その変化の過程が明らかにできることも注目されよう。Fig.18－1は壺形をなす胴中位にはM字突帯をもち壺の胴部を沸とさせる。また、甕の口縁にあたる突帯は大きく外に張り出し、甕の旧状をとどめている。より古い型式と認めることができる。ただし、これより古い型式を示すひさご形土器は、小都市の小都遺跡にその例をみることができる。後続するひさご形土器は2、3で、壺の胴中位の突帯は消え、頸部の突帯はM字形から三角形に変化し、甕の口縁にあたる突帯も外に大きく張り出すことはなく、他の突帯と比較し、やゝ大きい程度である。井戸出土の甑形土器の形式退化は著しく、もはや、壺形土器と甕形土器が組み合った土器とは想像できないほどである。壺形土器の胴のふくらみはほとんどなくなり、下方の甕形土器と同化し、甕の口縁にあたる突帯は他の突帯と大きさと大きな差がない。Fig.32－1にいたっては、甕形土器の口縁にあたる突帯は他と区別が困難で、もはや合体した器形でなく、新しい器形へと変している。いずれにしても、甑形土器は祭祀用土器の中では重要な意味をもっていることは疑いない。使用の組み合せが、同一個体の土器に移ることは、弥生時代～古墳時代においては、しば

しば見られる現象である。特に祭祀用土器にその現象が多いことは注意する必要があろう。

第4の成果としては井戸の確認とそこにおける祭祀の例を増加したことにあろう。井戸は、F－5a調査区で弥生時代後期に属する1基、F－5b調査区で中世に属する1基、F－6b調査区で弥生時代中期末に属する1基の計3基を調査した。F－5b調査区の井戸が曲げ物等の井戸枠を使用した可能性がある以外、いずれも素掘りの井戸である。弥生時代の井戸が八女粘土層下の砂礫層に達しているのに対し、中世の井戸は八女粘土層中で終っている。

井戸中には祭祀用の土器が数多く残されているが、本調査において検出した井戸についても例外でなく、多量の土器が出土している。出土遺物を整理すると以下の如くなる。

F－5a調査区井戸（弥生時代後期）

長頸壺3個　二重口縁壺3個、甕1個、高杯1個、ミニチュアー土器4個、木製品（火鑽臼1点、鍬2点、鋤1点、その他2点、いずれも破片）

F－6b調査区井戸（弥生時代中期末）

1面　袋状口縁壺2個

2面　袋状口縁壺5個　甕形土器2個　壺形土器1個

3面　鋤先口縁大型壺3個　甕形土器1個

4面　甕、鉢、高杯、壺、計17個、いずれも小型品

F－5b調査区井戸（中世）

ミニチュアー土器1個

F－6b調査区の井戸は少なくとも4面（4回）以上の祭祀行為が認められ、出土土器にも若干の時期差が認められる。中期末の段階は袋状口縁をもつ丹塗りの壺形土器や甕形土器が主体を占めるが、後期初頭段階になると土器は小型化し、丹塗りの土器はほとんどみられない。この現象はF－5a調査区でも同様で、丹塗り土器は含まれない。土器の中にミニチュアー土器が含まれるようになることが注目される。F－5a調査区井戸出土の木製品はいずれも破片であり、祭祀行為に使用されたか否かは即断できない。今後の類例をもって考察したい。井戸内のこれらの土器がいかなる祭祀行為によって井戸内に投棄されたか、現在のところ明確な解答は持ちあわせていないが、井戸内出土であるため、水に関連した祭祀であることは疑いなかろう。F－6b調査区の4回以上にわたる土器投棄が、埋土の観察から、壁の崩落との関連において把握できる可能性あることからすれば、単に井戸における水との関連性で行なわれた祭祀とみることができるが、F－5a調査区出土の木製農具等を祭祀行為の一部とみれば、水稲農耕における水、すなわち農業用水に対する祭祀行為とみることもできる。今後、整理して再考を試みたい。

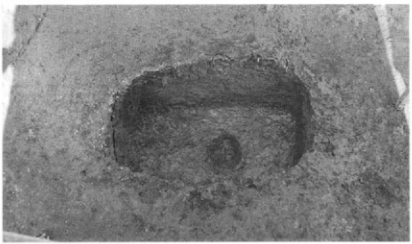
井戸内の出土土器は、一括資料であるがゆえに、土器編年の細分や地域間の交流についても注目される。F－6b調査区内の井戸の土器で、1面、2面の袋状口縁の口縁下の突帯は断面三角形であるが、その上層の3面の広口壺の突帯はいずれも断面形はM字形をしている。ただし、これらの甕形土器は突帯が多条化し、福岡平野の土器というより、遠賀川周辺の土器である可能性が強く、平野間の土器の変化のあり方が注目される。F－5a調査区のFig.10－1の土器は口縁部に三角形の文様をつける特徴があり、瀬戸内地方からの搬入品とみられる。これら、他の地方から搬入された土器が祭祀に使用されることも注意する必要があろう。

なお、井戸の埋土中の土器には時期の異なる土器が含まれていて、上層により古い土器が出土する傾向がある。これは井戸が埋まる過程で、地表面にあった古い土器が流れ込んだ結果であり、遺構中の土器等がかならずしも編年を反映していない証明でもある。

図　　版

(1)　F－5 b区（北から）

(2)　F－5 b区・中世井戸



(3)　F－5 b区・土壙

(1)　F－5ｂ区全景（東から）

(2)　F－5ｂ区・溝と中世井戸

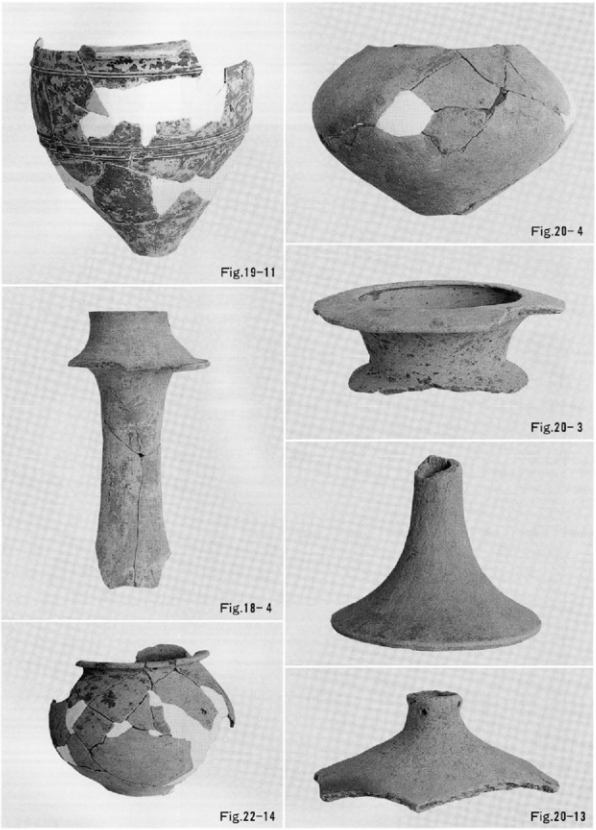
(3)　F－5ｂ区・溝と土器

(1)　F－5 b区・溝と土器

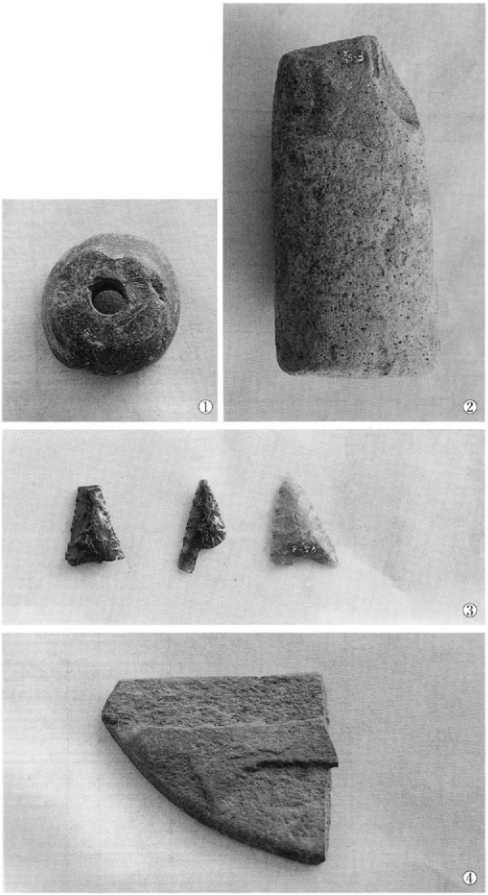
(2)　F－5 b区・包含層の土器

(3)　F－5 b区・土器出土状況

PL. 4



F－5 b区出土土器



F－5ａ・ｂ区出土石器　①紡錘車（F－5ａ区）②磨製石斧　③石鏃　④石包丁

(1)　F－6 b区・井戸断面

(2)　F－6 b区・井戸完掘後

(1) F－6 b区
井戸 4 面遺物出土状況

(2) F－6 b区
井戸 3 ・ 2 面遺物出土状況

(3) F－6 b区
井戸 2 面遺物出土状況

Fig.29－2

Fig.29－4

Fig.29－10

Fig.29－16

Fig.29－12

Fig.29－6

Fig.29－7

Fig.29－14

Fig.29－9

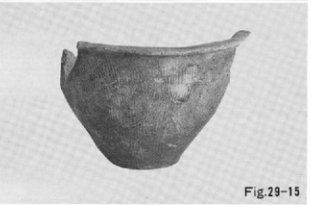


Fig.29－15

Fig.20－15

(1)　F－6 b区・井戸4面出土土器

F－6ｂ区
井戸３面出土土器

Fig.30－3

Fig.30－3

口縁裏面

Fig.30－1

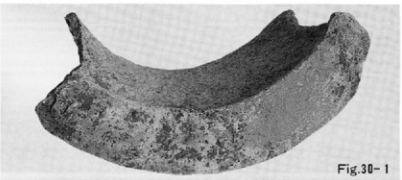
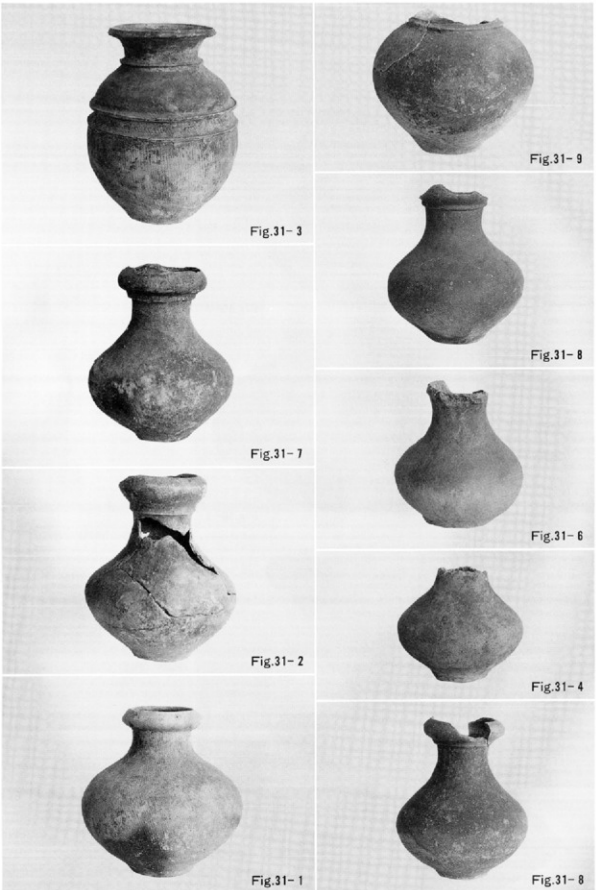


Fig.30－1

口縁上面貼布文



F－6 b区・井戸２面・１面出土土器

板付周辺遺跡調査報告書第18集
福岡市埋蔵文化財調査報告書第539集

1997年（平成９年）３月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　㈱西日本新聞印刷